
ラング・ド・シャ

三畳紀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラング・ド・シャ

【Zコード】

Z6025Y

【作者名】

三畠紀

【あらすじ】

閑古鳥の鳴いている喫茶店ラング・ド・シャを舞台に、ちょっとずれた人たちが織り成すホームドラマ調の「メディ」。

靈感ゼロなのに陰陽師の子孫として好奇の眼差しに曝される主人公や吸血鬼の娘を自称する中二病患者のヒロインなど、当人は普通に暮らしているつもりでもどこか変わった登場人物の悲喜こもごもの物語をごらんあれ。

Original blend（前書き）

この物語はタイトルと同名の喫茶店を主な舞台にした日常劇です。血沸き肉踊る戦闘も異形の怪物が起こす怪異も超常的なパニック現象も基本的には発生しません。

作品を盛り上げるエッセンスとしてファンタジー的なキーワードを登場させますが、物語の展開における影響は微々たるものであることをお断りしておきます。

平凡な日常の中で、どこかずれた人たちが紡ぎだす滑稽さを笑つていただければ著者として幸いです。

黄昏の傍げな口差しが差し込む部屋に置かれた寝台に、一人の妊婦が上体を起こしている。まだ少女の面影が残つた、母親になるにはいさか若過ぎるよつと思える風貌をした娘だった。アーモンド形のぱっちりと開いた瞳を彼女が横に向けると、寝台の傍らには落ち着いた色合いのスーツを着込んだ三十路前後の青年が控えている。

「ねえ忠将、一つお願いを聞いてくれる？」
ただまさ

「聞かせてくれ、お前に頼み事されるなんて滅多にないことだから極力要望には応えるつもりだ」

「わたしね、あなたにお腹の子の父親になつてほしいの」

「なつー？」

妊婦の唐突な申し出に忠将と呼ばれた青年は面食らつた様子である。忠将は精悍な面に青天の霹靂といった表情を浮かべていた。しかし忠将は彼女の頼みに単に驚いただけではなく、自分はそれを受け入れる立場にないといつ自信のなさもあるようだった。

「嫌がるのは当たり前よね、どう取り繕つたってこの子はあなたの子じゃないもの……」

「せめてあと少し、俺たちが出会つていればこんなことには……」

忠将の反応を見て妊婦の顔色が曇ると同時に、忠将の顔にも悔恨の念が浮かぶ。

「そんな風に言わないで、経緯はともかくわたしがこの世界にこの子が現れたことを祝つてあげたいの」

「^{まか}真実……」

「そしてこの子がわたしのお腹から出てきた時、あなたと一緒に祝つてほしい。だからお願い、わたしと二人でこの子を、蘇芳^{すおう}が生まれてくるのを祝福して」

寝台に座つたまま真実という名の妊婦は真つ直ぐな目で忠将の顔を見上げた。忠将は真実の真摯な眼差しに射竦められたように彼女のことを見凝視していた。

「お前の腹にその子が宿っていることに気付かず、お前とその子の二人から精氣を吸つていた間抜けで無神経な吸血鬼の俺が一緒にその子の誕生を喜んでいいのか？」

忠将は真実の顔を見つめたまま、不安げな面持ちで自分にその資格があるのかと彼女に問いかける。

「吸血鬼でも人間でも、本当に無神経なひとだつたらこうしてお産を控えたわたしに付き添わないわ。そんなお人好しあなたならきっと蘇芳が生まれてきたことをわたしと一緒に喜んでくれるつて信じているの」

「…もちろんだ。俺はお前とお腹の子に返しきれないほど^{ほど}の借りがある。お前が望むのなら、いや大きな借りがあるからこそその子が無事に生まれてくることを俺は強く願っている」

真実が忠将の人柄を信用した返事を述べると、忠将は彼女が寄せてくれた信頼に応えるべく精悍な顔を引き締めて首肯した。真実たち親子に対して背負っている借りは忠将が彼女たちの関係を考える上で大きな懸念材料であったが、それゆえ真実のお腹にいる子どもが無事に生まれてくることを願う理由でもあった。

「よかつたね蘇芳、あなたが出てくるのを待つていいひとが二三人いるんだよ」

「直接会える時を楽しみにしていいんだ、蘇芳」

忠将もその出生を待ち望んでいたことを胎内の子どもに真実が語りかけながら、薔が開花するように口元を綻ばせる。真実の優しげな笑みに魅入りながら、忠将も彼女の腹の中にいる子どもに語りかけた。

「ふふ、本当にお父さんみたいね。じゃあ蘇芳は吸血鬼の娘ってことになるわね」

「茶化すな。だが本当の父親の身代わりでしかなくとも俺はお前だけではなくこの子を、蘇芳を精一杯愛したい。生き血を啜つて命を繋ぐ呪われた身に墮ちて、本来持てるはずのない家庭を持てるなんて俺は幸せ者だ」⁵

真実の冷やかしに対して忠将は一瞬顔を顰めるが、やがて望むことさえ出来なかつた幸せを掴みかけていることの喜びを感慨深そうな顔で噛み締める。

「きっとお腹の中で蘇芳も、吸血鬼のお父さんよろしくねつて言ってるわよ」

「アラジンセヨウシクナ、蘇芳」

本当に真実の胎内に宿つてゐる命に挨拶をされたような気がして、忠将は未だ見ぬ我が子に返事をする。親子三人で過ごす和やかな時間で、忠将も真実も至福のものを感じてゐるようだった。やかな顔をしていた。

六

「あたしが生まれる直前にお母さんとお父さんは、何をしたんだって？」

「へえ、どんな事情があつても君が生まれてくれ」と喜び、「お母さんもす」こねび、その気持ちにちゃんと応えた忠将ちゃんも格好いいね」

喫茶店の一角に一組の十代の少年少女が相対している。アーモンド形の目をした長い髪を緩く編んだ少女が自分の誕生前夜に母親たちの間で交わされた会話を恍惚とした顔で語ると、彼女と向かい合つて座っている少年は彼女に相槌を打つ。

「でしょう？」
あたしも忠将みたいなひとと恋がしたいなあ

「……だつたら学校に行けよ、あそこにいる半分は男なんだから君の眼鏡に適う人だつて1人くらいいるだろ?」

「あたしはバカやつてはしゃいでいるような子どもに興味ないの」

「自分だつて僕より年下の中学生のくせに」

自分の父親代わりになつてくれた男のよつに頼り甲斐のある年上の男性への憧れを少女は抱くのを、少年はうそをついた顔あげつらつ。

「戸籍上は一四歳だけど、お母さんがあたしを身籠つた時から数えれば一七歳になるんだから厳密にはあんたより年上よ」

「はいセーですか」

「その投げ遣りな態度は何よ常葉？」^{ときわ}口では適当なこと言つてゐるけど、ホントは全然あたしの話信じてないでしょ！」

常葉と呼んだ少年が自分の発言に対して氣のない返事をすると、少女は眦を吊り上げて少年の顔を睨む。少女の獲物に飛びかかるつとすむ猫のよつな目に氣圧されて、常葉は若干顔を強張らせた。

「そんなことないよ。平凡な生い立ちを辿つてきた僕と違つて、君の人生は生まれる前からドラマチックだなと感心してゐるよ」

「陰陽師の子孫のあんたが平凡な訳ないじゃん。あんたが生まれた時に街の上空を龍が横切つたとか、生まれた病院が不思議な光に包まれたとかそういうヒーリングの一つや二つあるでしょ？」

「そんなことあるか、僕も兄貴も全く普通に生まれ育つてきたんだ。その過程に幽霊も怪奇現象も吸血鬼も一切関与していない！」

少女に自分の出血をダシにされて揚げ足を取られると、それまで冷淡な対応をしていた常葉は顔を紅潮させて声を荒立てて彼女に反論する。

「つまんないの～漫画や小説じゃ陰陽師はすぐミステリアスに描かれているのに、実物はこんな感じでもいる奴なんて幻滅」

文献や講談の中で都の怪異を超常的な力を駆使して解決する陰陽師の末裔であるにも関わらず、常葉が一切特別な能力を持たないと少女は落胆したように溜息を吐く。

「『』期待に添えなくて残念だけど、君たちを特殊な力で楽しませる義務は僕らにないよ。陰陽師の末裔ってだけで、靈感が強いとか超能力が使えると他人から勝手に思い込まれるのはいい迷惑さ」

「常葉はホントに幽霊が見えたり式神を使つたりできないの？」

「いい加減にしろ！ 僕は『』く普通の、良識ある人間だ！」

一度は落ち着きを取り戻したかに見えた常葉だったが、少女が懲りずに常葉が陰陽師の子孫に相応しい特別な技能を隠していないかと疑つてくると、再び怒声をあげてしまう。

「…良識ある人間が喫茶店の中騒ぐんじゃねえよ、周りの迷惑だろうが」

「す、すみません来栖さん……」

カウンターの向こうにあるキッチンから低音でドスの利いた声に罵声を張り上げたことを咎められると、常葉は身震いさせてキッチンで食器を拭いている大柄な男に謝罪する。

「周りの迷惑つてあたしたちの他にお客さんいないじゃん？」

「仮に客がいなくても公共の場ではマナーを弁えろって意味だ」

「仮に」と「つか、基本的にこの店お客なんかいないじゃん」

「つむせえ、お前は一言も一言も余計なんだよ蘇芳ー。」

愉快そうに髪を緩く編んだ少女が強面のキッチングで作業をしている来栖をからかうのを、当事者でない常葉が緊迫した表情で見つめる。10歳前後は年下の少女に手玉に取られて業を煮やした来栖は獣のように猛々しく吼えた。

「おちついでクーくん、子ども相手にムキになるのは大人げないよ？」

「すまん丹まんじん、ガキ相手に怒鳴るのは情けないよな」

キッチングの奥で焼き菓子の種をボウルで混ぜていた癖のある髪をした美人が、年下の蘇芳の軽口に本気になってしまった来栖をたしなめる。丹と呼ばれた女性の口調は決して強くはなかつたが、来栖は彼女の一声で氣を落ち着かせると自分の不甲斐なさを恥じた。

「やーー、まこねえに怒られてやんの」

「あなたも調子に乗り過ぎよ蘇芳。いくら家族同然でもクーくんはあなたよりずっと年上なんだから少しは敬意を持ちなさい」

「はーー」

丹は来栖だけでなく年上に対しても不遜な態度をとる蘇芳にも非が

あると注意すると、蘇芳は全く反省していない様子で丹に生返事をした。

「生意氣な口を利いた罰としてお店の前を掃いてもらおうかしら？もうそろそろお茶の時間でお客さんも来るでしょうしその前にお願ひね、蘇芳」

「え、あたし今、学校に行くための相談を常葉に聞いてもらっているんだけど」

「居候のくせに口答えすんな、さつさとやれ」

寛大な丹であつたが蘇芳のふてぶてしい態度をとうとう容赦する気は失せたらしく、寒風吹き荒ぶ表の掃除を彼女に言いつける。案の定蘇芳は寒い中外に出ることを拒み、適当な言い訳をして逃れようとするが、来栖が有無を言わぬ強い態度で早々に言われた仕事に取り掛かるよう促した。

「一蓮托生よ、あんたも来なさい常葉」

「なんで僕が…え、ちょっと…せめてジャケットへいらして着せよー」

「つべこべ言わずに早く外に出る。クーくんとまこねえを本氣で怒らせたら、どんな化物だつて一撃で吹き飛ばされちやうんだから」

これ以上口答えをすると酷い目に遭われる気配を察して、蘇芳は常葉を巻き添えにして店の外の掃除をすることを承諾する。空調の利いた店内では必要ないためにジャケットを抜いで薄手のロンT一枚、だつた常葉は防寒のためにせめてジャケットを着せるよう訴

えたが、蘇芳は彼の言い分を無視して強引に表に引き立てていった。

「蘇芳は本当に血口の中だな、忠将さんが甘やかしたのがいけないんだ」

「やうかしら、ウチの子になつてから葵の悪影響を受けたせいだと思つけど?」

無関係な他人を引き込んで店の前の掃除をしている蘇芳を窓越しに見つめながら、来栖が彼女を幼少期に養育していた人物の非を唱えると、丹は蘇芳が我慢な性格になってしまった原因是忠将ではなく自分の妹にあると推測する。

「かもな、今のあいつは中坊の時の葵にそつくりだ」

「まだ葵よりは聞き分けがあると思うよ。蘇芳はいやいやでも掃除や洗濯を頼めばやつてくれるけど、葵は絶対にやらなかつたから」

「もしかしてあいつなりに他人の家に厄介になつてゐることに気を遣つているのかもな」

「他人つて…わたしたちは法律的にも実質的にも家族でしきつ?」

「中坊になつて少しば世の中が見えてくるようになると、自分が他のクラスメイトとはかなり異なる経験を持つていることにも気付くだろう。そして学校の連中だけじゃなくて一緒に同居している家族の中でも自分が何か違つていることも感じていてはすだ。だから最近やたらと自分が忠将さんの娘つてことを強調して、戸籍上の親である斎さんに余所余所しい態度をとるようになり、ウチに転がり込んできたんだろうな」

自分の妹の中学時代と比べれば蘇芳の方が大人しいと丹は語るが、来栖は彼女の妹と蘇芳の際は身内か他人かという点にあると分析する。そして傍若無人な振る舞いをしている背後には蘇芳の複雑な生い立ちが暗い影を落としていると来栖が察したのを聞いて、丹は秀麗な顔を曇らせる。

「でも、どんな経緯があつても蘇芳は大切なわたしの妹よ」

「それはあいつも分かっているよ、だからお前はどうしり構えてあいつのことを見守つてりやいい」

「うん……」

例え血の繋がりはなくとも蘇芳は家族の一員であると丹が訴えると、来栖もそれに首肯して保護者として長い目で妹の面倒を見るよう助言した。丹は微笑を浮かべながら来栖の言葉に頷き返す。

「ま」ねえ、掃除終わったよ

「終わったって、ほとんどやったのは僕じゃないか

「家の手伝いをするあたしつて偉いね、だから学校なんか行く意味ないわ」

勢いよく扉を押し開けて蘇芳が掃除が終了したことを報告していくが、実際に作業をしたのは部外者であるはずの常葉らしかった。しかし常葉の恨み言を黙殺して、蘇芳は家事を手伝つ自分を自賛する。

「あんなふざけたことを抜かすガキを野放しにはできないな…見守る、いや監視する必要は充分あるな」

「ええ…蘇芳、いくらウチの仕事を手伝つたつて学校に行かない理由にはならないよ！」

来栖は改めて蘇芳に由を行き届かせておく必要性を認識し、丹もそれに同意して不登校を続けている彼女に通学するよう呼びかける。

「そんなあ…せっかく寒い中頑張ったのに」

「ちりとり持つてただけのお前が何を頑張つたつて言つんだ！」

蘇芳は口を尖らせて不平を述べるが、常葉が集めた「ミを拾う直前まで店と隣家の間に隠れて冷たい風から身を守つてきた彼女が何を努力したのかと常葉が罵声を発した。

Original blend 了

1、Sunset and spice（前書き）

序章にあたる前回を読んでこの話に興味を持つていただいた方、ありがとうございます。口メディーの割に笑いのツボがいまいちな内容となっていますが、回を重ねていく上で精進していきたいと思うのでよろしくお付き合いください。

1、Sugar and spice

僕が行き着けの喫茶店は彼の自宅から徒歩5分の距離にある小さな店だ。お客さんで賑わっているはずの午後の時間帯もテーブルには空きが田立ち、座つておるお客さんの顔もだいたい同じでお世辞にも流行つてゐるとは言えない。

でもそんな窮状を田の当たりにしても、店の主人はそんなことじこ吹く風とこづよつに相変わらず商売つ氣のない営業を続けていふ。

決して小遣いの金額に恵まれてゐる訳ではない高校生の僕が3日に一度の割合で訪れているのは、ひとえにラング・ド・シャという名前のこの喫茶店への愛着だ。一杯400円のコーヒーを頼んだところで火の車に違ひないラング・ド・シャの経営状態が改善されるとは思えないけど、焼け石に水でもやらないよりはましだとなけなしの小遣いをやりくりして僕はラング・ド・シャに通つていた。

「えつ、珍しくテーブルが埋まつてゐる!?

今日も閑古鳥が鳴いでいる店でゆつたりしすぎるほど寬いでコーヒーを飲もうと店の扉を押し開けると、僕は信じられない光景を目の当たりにする。常に半分以上の席が空いているはずのテーブルが全て埋まつていて、僕は初めてラング・ド・シャの店内が狭く感じた。

「珍しくは余計よ、常葉くん」

「すみません丹さん…でもこんなにお客さんが入つてゐるのを見る

の、常連の僕も初めてですよ？」

「実を言つとね、わたしもこんなに大勢のお客さんのオーダーを捌くのは初めてだからてんてこまいなの」

ラング・ド・シャの女主人をしている丹さんは、前例がないほど店が盛況なせいで対応が苦労している失態を取り繕つような笑みを浮かべる。

丹さんはもう大学を卒業していたけど、思春期の女の子みたいに恥らう彼女の笑顔に僕は思わず見惚れてしまう。

落ち着いた店構えや安価で素朴な味付けの割に美味しいメニューも僕がラング・ド・シャに愛着を持つ理由だけど、憚りずと言えば丹さんの存在がこの店に入れ込んでいる最大の理由だ。

丹さんと僕は10歳近く歳が離れているけど、そんなことは全然気にならない。むしろ年上だからこそ丹さんからはクラスメイトの女の子たちにはない抱擁感を覚えるし、時折見せる少女のような可憐さが僕の心を鷲掴みにしている。

「丹ースコーン焼けたから3番テーブルに持つていいってくれ」

僕が丹さんの笑顔の余韻に浸っている間も、カウンターの奥にあるキッチンでは慌しく調理が勧められていた。丹さんを呼ぶ声と共にカウンターの奥から丸太のような腕が突き出でてくるのを見て、僕は我に返る。

「わかった。ところでクーくん、5番のお客様が注文したクリームブリュレは出来た？」

「スコーンを出すまで作業するスペースなかつたけど、焼き色をつけるのなんてすぐだから3番テーブルから戻ってきた時には出せるぜ」

「火加減間違えて焦がさないでよね?」

「心配すんなつて、最近は滅多にミスらなくなつたろう?..」

「そうだね、じゃあブリュレの準備お願ひねクーくん」

次に出すオーダーについて協議した後、焼きあがつたスコーンを乗せた皿を受け取つた丹さんは注文したお客様のテーブルにそれを運んでいく。

スコーンの皿を出して空いたスペースに足元の冷蔵庫から取り出したブリュレの入つたココットを置くと、キッチンにいる人物が砂糖を振るつたブリュレの表面にバーナーで焼き色をつけはじめた。

適度な間隔と時間で炙られたブリュレの表面が綺麗な飴色になる。焼き色がついたブリュレのココットを皿に乗せてスプーンを添えると、キッチンで作業している人物がカウンターの前に戻ってきた丹さんに絶妙のタイミングでブリュレの皿を差し出した。

「綺麗な焼き色ね、もうクーくんの方がわたしよりも上手になつちやつたみたい」

「こんなモン慣れればどうしたことねえよ」

「初めの頃はこんな難しいこと出来るはずないって言つたのが嘘み

たいだね

「…つるせえ」

丹さんにブリュレの焼き色を褒められた人物は得意げな顔になつたけど、以前はブリュレに焼き色をつけることに苦戦していたことを持ち出されると一瞬で決まりの悪い顔になつた。拗ねたようにそっぽを向いた彼に丹さんはいたずらつぽい微笑みを向けると、受け取つたブリュレを注文した客のテーブルに運んでいつてしまつた。

「おー、こつまでもドアの前でぼけっと突つ立つてんじゃねえよ」

「す、すみません来栖さん……」

僕が出入り口の扉の前に立ち尽くしているのに気付くと、作業の手を止めて来栖さんが入店するのかしないのかをはつきりするように促してきた。僕は撫で肩が更に落ちているのを自覚しながら、おずおずと空いているカウンターの席に座る。

「またいつも same のバーか？」

180㌢を超える長身で肩幅も広く、制服のワイシャツの上からでも全身が筋肉の鎧で覆われていることが覗える来栖さんにカウンターの向こうから田を向けられると、彼に比べて格段に貧相な体格をしている僕は反射的に萎縮してしまつ。

「…たまには違うものを注文したほうが、いいですよね？」

「そんなこと俺に訊くな、こつまはお前の注文に応えるだけだ」

遠回しに一番安いメニューであるコーヒーばかり注文していることを責められているような気がして別のメニューを頼むべきか訊ねると、来栖さんは日本人離れした彫りの深い顔の唇をへの字に曲げて自分にそんな命令権はないと返してきた。

「…メニューを見てから考えます、注文決まつたら声をかけます」

はつきりと他のものを注文しろと言つてもらつた方が気は楽だつたが、余計なことを言つて来栖さんの機嫌を損ねなかつたので僕は自分の席の前に置いてあるメニューを手にとつて注文を考えるふりをする。

「おひ、冷え込んできたし温かいモンをお勧めするぜ」

「…ありがとうございます」

商売人だけあつて来栖さんは季節に応じたメニューを勧めてきた。確かに来栖さんが言うとおりこのところ朝夕大分冷え込んできて冷たいものを注文する気にはなれなかつたけど、肌寒さを感じるのは気温のせいばかりではない気がする。

大柄な体格だけでなく濃い陰影を刻む仏頂面の淒みや威圧的な態度で正直僕は来栖さんが苦手だ。堅気の人間には見えない雰囲気を纏う彼と向き合つているだけで、内臓がきりきりと締め付けられるような気がしてくる。

でもラング・ド・シャは基本的に女主人の丹さんと調理スタッフの来栖さんの2人で切り盛りしていて、店を訪れればほぼ毎回彼とも顔を合わせなければならない。

おまけにどうこう経緯があったのかは分からぬけど、聖母のように博愛的な丹さんと仁王のように厳肅な来栖さんは非常に仲睦まじい関係だった。2人が阿吽の呼吸で給仕と配膳を行いつつ、笑顔の絶えない軽妙なやりとりを見せられるとともに自分のようなひよつこが割って入れるような仲ではないと痛感せられる。

丹さんへの思慕が報われることはないだろうと充分に理解しているが、僕は未練がましくラング・ド・シャに通つては彼女が鬼神のような偉丈夫来栖と長年連れ添つた夫婦のように自然な雰囲気で仕事をしている姿を傍観していた。

丹さんの笑顔に癒される一方で、来栖さんの無言のプレッシャーに曝される時間は飴と鞭を同時に体感できる。僕はひょっとして自分がマゾヒストなんじゃないかと最近疑い始めていた。

「ちょっとクーくんお密さん怖がつてるじゃない。そんな無愛想に接客してちゃ、まじねえにまた怒られるよ？」

財布の中身を考慮しつつメニューに目を馳せていると、若干高いトーンの声が聞こえてくる。横田を向けた先に十代半ば、恐らく中学生の女の子が腰に手を添えて呆れた顔でキッチンにいる来栖さんのことを見上げていた。

女の子は背中に届くくらいの長さの髪を一本の三つ編みにして纏めており、エキゾチックな柄をした長袖のワンピースの上に丹さんと同じデザインのエプロンをかけていた。アーモンド形の目をした活発そうな印象の顔の造作は整つていて、同じクラスにいれば注目を集めのだろう。

「俺は普通に注文を聞いただけだ。お前こそ手が空いているんなら

フロアでつむぎをしていたので、じつちで洗い物でもしたらどうだ
蘇芳？』

「セーフのブリコレで一通りオーダーは捌けたから空いている食器
を下げなくせよ。食器片付けたら上がるから後はよろしくね、クー
くん」

「ちょっと待て、面倒なことを他人に押し付けてばっくれるなよ」

「あたしはボランティアで店の手伝ったのよ、食器を下げるだけで
も感謝してよ」

「おこ蘇芳、」

蘇芳と呼ばれた女の子は来栖さんとの提言を無視して身を翻すと、
店内を回って空になつた食器をトレイに乗せていく。

「来栖さん、あの子なんで店にいるんです？」

ラング・ド・シャの常連と自他共に認めていい僕も、これまで店
を訪れた時は一度も彼女がフロアに出ているのを見かけたことがな
い。新しくバイトということだったら腑に落ちるけど、ボランティ
アで店の手伝いをしてくると口にしていたことを踏まえるとどうと
は考えにくい。

客でもなく店員でもない彼女がどうして店の手伝いをしてくるの
か疑問に感じ、思い切って来栖さんに質問してみる。

「客の入りを見て2人じゃ対応しきれないと思った丹が、あいつを
応援に呼んだんだよ」

「応援に呼んだって…どうしてですか？」

「暇を持て余しているモンが忙しい時に家の仕事を手伝うのは当然だろ、ところで注文は決まつたか？」

「『ア』をお願いします。それよりも来栖さん、家の仕事を手伝つてことはあの子丹さんのお妹なんですか？」

「ああ丹の下の妹だ、小さい頃は可愛かつたけど今じゃあんな生意気になつちまつた」

「おじさんみたいな」と言つてゐし、クーくんも歳じゃない？

来栖さんから彼女の素性を聞いて僕の溜飲が下がる一方で、ようやく注文を受けた来栖さんは彼女の成長を苦々しい表情で語る。成長するに従つて憎たらしさだけが増したと愚痴を零す来栖さんに反論するように、彼女はわざと大きな音を鳴らして立錐の余地なく皿とカップが積まれたトレイをカウンターの上に置いた。

「うるせえ、まだ四捨五入すれば二十歳だ。用が済んだらさつさと帰れ！」

「手伝いはこれでお終い、今からは密としているわ。クーくんバナナジュース頂戴」

カウンターの前に並べられた椅子のうち、僕の右隣のものの背もたれにエプロンをかけると彼女は澄ました顔でその席に座つて来栖さんに注文をした。

「中途半端に仕事投げ出したくせに、偉そうな口を利きやがって……」

…

「ママ～」の店員感じ悪いよ～

「…驕らないうからな、ちゃんと金は払えよ」

「分かつてるつて。なんだかんだ言つても素早く切り替えが出来るんだから、さすがに歳を食つているだけあるねクーくん」

知り合いでも金を払つてもうれるからには密としてもてなさなければならぬと来栖さんは苦笑の選択をする。彼女は調子のいい返事をすると、楽しげな顔で頬杖を吐きながら注文したバナナジュースが出てくるのを待つ。

鼻歌を歌い椅子の下で足を揺すりながらキッチンでミキサーに刻んだバナナと牛乳を投入している来栖さんを眺めている姿は子どもっぽいが、互いに見慣れているとはいえた年長者で強面の来栖相手に全く臆さずに接する彼女の豪胆さには感心する。

「何か用?」

「いや、別に……」

「お待かどりやま」

僕の視線に気付いた彼女が怪訝そうな眼差しを向けてくると、適当にはぐらかして目を逸らした。正面に向き直るとちょうどカウンター越しに来栖さんがごつい手で僕の前にホットココアの注がれたカップと、彼女の前に紙のコースターを敷いてその上にバナナジュ

ースのグラスを置く。

「やつだ、お前に頼みたいことがあるんだけど聞いてくれるか？」

「来栖さんが、僕に頼みたいことですか……？」

何となく気まぐれな雰囲気で蘇芳さんと隣り合って口コアを啜つていふと、来栖さんがキッチンから身を乗り出してくる。濃い陰影に縁取られた来栖さんの瞳を正面に受けたと、その威圧感に気圧されて反射的に身構えてしまつ。

「そんなにビビんなつて、何も獲つて食あうつて詰じやないんだ。数少ない店の常連としてお前に頼みたい」とがある

「…なんでしょう？」

恐る恐る見上げると来栖さんは狼が獲物を見つけたような獰猛な笑みを返してきた。気楽に話を聞くよつに言つてきた来栖さんの顔を見ると、僕は余計に不安を駆り立てられる。

「普通に学校行けるよう、ここつの相談に乗ってくれねえか？」

来栖さんは身を乗り出した状態で、僕の隣に座りグラスの底に沈殿したバナナジユースの残りを吸い上げている蘇芳さんのことを指し示した。

「えつー!?

思わず僕は素つ頓狂な声をあげてしまうけど、来栖さんの唐突な申し出は彼女にとつても青天の霹靂であつたらしく蘇芳さんは幸せ

そうな顔で飲んでいたバナナジュースを噎せてしまつ。

Sugar and spice 了

2、Foxy girl

「ど、どりごうつもりよクーくん！？」

「ガキはちゃんと学校で勉強して来い。大人の俺たちが何度も言つても駄目でも、同じくらいのガキに説得させれば上手くいくかもしないだろ？」

「そりよ蘇芳、あなたこの1ヶ月全然学校に行つてないじゃない。来年は受験生なんだから授業受けないとみんなに遅れちゃうわよ？」

彼女が発言の意図を問い合わせると来栖さんは顔に似合わず至極真っ当な意見を述べる。来栖さんに続いてカウンターに戻ってきたこの喫茶店の女主人である丹さんも妹の進路を案じて学校に行くよう勧めてきた。

「いいよ勉強なんかできなくたって、学校に行くばかりが人生じゃないじゃん」「..」

「蘇芳、学校は勉強だけの場所じゃないわ。教室で過ごすことでも少しずつみんなと上手くやつしていく社会性を培つ場所なのよ？」

「あたしは充分社会性を持つていいから問題ないし、クラスの連中はみんな子どもだからつまんないんだもん。街で適当に遊んでいる方がよっぽど有意義だわ」

「あなたの言いたいこともわかるけどね、蘇芳が学校に行かずに街を遊びまわっていたらきっと忠将さんは喜ばないわよ？」

蘇芳さんは学校に行かないことの正当性を示すと屁理屈をこねるが、丹さんは妹に優しい口調でしかし厳しさを覗わせながら説得を続ける。話に出てきた忠将という人が何者なのか分からなければ、その名前を聞くと蘇芳さんは不登校をしていることに後ろめたさを感じたようだつた。

「…どうしても居心地が悪いんなら無理に学校に行く」とはなって忠将も黙つてたよ」

「それは小学生の時の話だらう、おまけにその頃は普通に学校行ってたじやないか。減らす口ばかり言つてないでおとなしく学校に行け」

「クーくんだつてろくに学校に行かない不良だつたんでしょう、そんな人が学校に行くように言つても説得力ないよ！」

蘇芳さんはしづとく自分が学校に行かない正当性を押し通そうとするが、来栖さんは彼女の言い分を一蹴した。でも蘇芳さんも来栖さんの過去の話を持ち出して意地になつて反論すると、痛い所を突かれたらしく来栖さんは黙り込んでしまう。

「いい加減にしなさい蘇芳。クーくんは行きたくともいけない事情があつたから学校に通えない所もあつたけどあなたは違うわ。通えるのに通おうとしないだけ、それじゃ駄々をこねている子どもと同じよ？」

周りにいるお密さんることを考えて発せられた丹さんの声は決して大きくなかったけれど、蘇芳さんを黙らせるには充分な迫力があった。おつとりとした雰囲気や柔軟な表情で気付かなかつたけど、蘇芳さんに向けられた丹さんの吊り目的眼光は鋭く、傍目から見て

いる僕でも気圧されてしまつほどだった。

今は優しくていい奥さんって感じだけど、実は学生時代の丹さんはぐれでいて、それが来栖さんとの縁の始まりなんてことはないよな？」

「じゃあ学校に行つて何があるつていうのよ、学校で大人しくお勉強してこんななよなよしたいい子ちゃんになるのがいいことなの！？」

保護者からの叱責に癪癪を起こした彼女は席から立ち上がり、自分の隣で喧々囂々の言い合いに圧倒されている僕のことを腹立たしそうに指差してきた。

あの、僕が頼りない男子高校生であることは否定しませんけど、初対面の相手のことをそんなに悪し様に扱き下ろさなくともいいと思うんですけど……

「誰もそんななまつちろいガキになれとは言つてねえ、ちゃんと自立した大人になれるように社会経験を学校で積んで来いつて言つてんだ！」

「社会経験ならここでも出来るじゃない、わざわざ学校に行く必要はないわ。いざとなつたら忠将のお店で働かせてもらうものー！」

来栖さんの恫喝するような一声は向けられた相手ではなく、部外者の僕を震え上がらせる結果となつた。蘇芳さんは隣で怯えている男を他所に屈強な体躯に日本人離れした造作の顔の眉間に深く皺を刻んでいる来栖さんに食つて掛かる。

「忠将さんはちゃんとした人間になつてほしくてあなたをウチに預けたんだから、そんなことをしてはあなたのためにもならないし忠将さんの思いを踏み躡る」ことになるわよ」

丹さんは聞き分けの悪い妹に対してもしきつい口調で言い聞かせる。先ほどと同じく忠将という人の名前を聞くと蘇芳さんは罵詈雑言を吐き出していた口を急に閉じて、しおらしい態度を見せる。

蘇芳さんに関する丹さんたちのやりとりを聞いてころもん、元ひづり、僕は彼女たちが抱えている事情がどんなものなのか漠然と見当がつき始めていた。

多分蘇芳さんは丹さんの血の繋がった妹ではなく、丹さんの家に養子として迎え入れられたのだろう。恐らく蘇芳さんは丹さんの家に迎えられるまで幾度か名前の上がつてている忠将という人と暮らしていくんだろう。その忠将さんは余り大きな声では言えないような商売をしている人で、蘇芳さんの健全な生育を鑑みた上で丹さんの家に預けることを決めた。きっと丹さんの家族と蘇芳さんの過去にはこんなことがあったに違いない。

幼少期は特に自分の境遇に疑問を抱かなかつた蘇芳さんだったが、思春期を迎えて世の中が少しずつ見えてくると自分の経験の歪さに気付いてしまつた。そして自分の背景が容認できずそのまま反発として彼女は不登校になつたのだ。

「…嫌だよね、自分は何もしないのに親とか先祖のことやクラスメイトから変な目で見られるのは」

「あんた、あたしに同情しているの？」

彼女自身には何の落ち度もないのに、生まれてきた瞬間から偏見の目を向けられるレッテルを貼られてしまつていてことに共感を覚えて僕は自然に独り言を呟く。するとそれまで自分の隣に座っている僕の存在を失念していた蘇芳さんが、僕の言葉に反応を見せた。

僕は俯いたまま横目で彼女のことを見上げる。蘇芳さんはアーモンド形の大きな目で僕の横顔を真っ直ぐに見下ろしていた。

「同情されたことが気に障つたなら謝るよ。でも分かるんだ、自分の家族や親戚のことで周りから好奇の視線を向けられるこの居心地の悪さは

「そうね、吸血鬼の娘だつて言つただけで、クラスメイトどころか他のクラスの奴らにドン引きされたりからかわれたりするのは堪つたモンじゃないわよね」

「へつー？」

来栖さんから蘇芳さんが学校に行けるように彼女の相談に乗つてほしいと頼まれたことに続いて、僕はまた上擦つた声を出してしまう。

反射的に首を横に向けて彼女の顔をまじまじと僕は見つめる。蘇芳さんは場を和ませようとして冗談を言つているのではなく、自分が吸血鬼の娘だということに対しても理解が得られないことを本当に心外に感じているようだった。

「このご時勢に吸血鬼の娘だなんて自己紹介したら、引くのは普通だと思うけど……」

「どうして、だつてこの街には吸血鬼は結構いるじゃない？」

それでも蘇芳さんがふざけているのだと信じて、僕は彼女の級友たちの反応は自然なものだと答える。だが彼女は僕の正論を聞き不思議そうに首を傾げながら再びおかしなことを口走る。

「…例えばどんな人が吸血鬼なんですか？」

「身近な人だとまこねえとまこねえのお母さん、それとあたしのお父さんの忠将」

蘇芳さんは自分の姉とその母親、そして自分の父親が吸血鬼だと答えた。僕は失笑することも忘れて引き攣った表情のまま、蘇芳さんの向かいに佇む丹さんに視線を移す。

丹さんは紙のように色白の美人で、実際の年齢である二十代半ばよりは若く見えるし、少々浮世離れしたふわふわとした雰囲気はあるけれど、そんな感じの人は丹さんの他にも大勢いる。

自身が経営するこの喫茶店ラング・ド・シャを丹さんは毎日昼前には店を開けているし、燐々と日光が降り注ぐ中商店街やスーパーに買出しに行っている姿を何度も見かけたことがある。結論から言えば丹さんが陽光に弱い吸血鬼であるはずがなく、蘇芳さんは信憑性皆無のほらを吹いているだけだった。

「何がおかしいの？」

「そりや吸血鬼なんているはずがないものをいふと言ひ張つて、しかも昼間働いている自分のお姉さんを吸血鬼だなんて見え透いた嘘をついたら誰だつておかしいでしょう？」

他愛もない嘘を滑稽に感じて僕の口元が緩んでしまったことに彼女は目敏く気付く。しかし僕は言い訳をせずに彼女の嘘を一笑にふすと、丹さんと来栖さんに同意を求めるように視線を向けた。

「いや、吸血鬼がないとは言い切れないだろ？？」

「そうよ常葉くん、自分で確かめてもいいのに断言するのはよくないわ」

意外なことに来栖さんと丹さんは彼女の荒唐無稽なほら話に食いついてきた。一瞬彼らも吸血鬼の存在を信じているのかと思つて僕は呆気に取られてしまう。だが丹さんたちが頭ごなしに彼女の嘘を否定しなかつたのは、下手に蘇芳さんの機嫌を損ねず適当に話を合わせておいて彼女を学校に通わせようとする算段を踏んでいるのだろうと冷静に判断する。

複雑な家庭事情の悩みに加えて思春期特有の痛い思い込み、俗に言つ中二病に罹患しているらしい蘇芳さんを社会復帰させるために、丹さんたちが苦労していることがうかがい知れた。

「… そうですね、いろんな人がいるこの世界に吸血鬼がいたっていいじゃないですか」

「ここで吸血鬼が実在するか否かの議論をすることは不毛であり、僕は掌を返して丹さんたちと同じく吸血鬼が存在する可能性を示唆する相槌を打つ。」

今話し合つべきはいるはずもない吸血鬼のことではなく、現実に人生を棒に振るうとしている1人の少女をどうにか学校に戻らせる

道筋を立てることがだつた。ここで丹さんの妹の社会復帰に貢献しておけば、絶望的に見える僕の恋にも一筋の光明が差してくるかもしれないという下心も動いて、僕は大人たちと同じスタンスを持とうと務める。

「ほらね、人間と吸血鬼は仲良くできるってあなたも思うでしょ？ 実際に吸血鬼のまこねえと人間のクーくんはお互いに好き同士で高校生の時から同棲しているもんね！」

都合よく僕の言葉を解釈した蘇芳さんに手を握られて、不覚にも一瞬僕はときめいてしまう。だが彼女の口から語られた丹さんと来栖さんの深い仲を聞いた途端、淡い恋心ががらがらと音を立てて瓦解していくを感じた。

「高校生の時から、同棲……」

「大切なのはそこじゃないよ、吸血鬼のまこねえと人間のクーくんが愛し合っていることだよー！」

「蘇芳、周りのお客様に迷惑だしそんなに大きな声で騒がないでちようだい……」

「せうだ、お前の声が店中に響いて耳が痛いんだよ」

丹さんと来栖さんの関係について注目しているポイントに齟齬があつたものの、蘇芳さんは再度2人が親しい仲である事を力説する。蘇芳さんに店にいるお客様たちに自分たちの関係を言い触りされて、丹さんと来栖さんは本当に恥ずかしそうだった。

「え~だつてホントのコトじやん。あんまりにもまこねえとクーく

「俺たちがよくて、あおいねえの田の毒だつて言われたから斎さんの家から引っ越したんじゃない」

「俺たちは一人前と認められたから斎さんの家から独立したんだよ。飲み終わつたんならわかつてウチに帰れ!」

「ウチつてこの上じやん、そんなに急かさなくてすぐ帰れるじゃない?」

「「」は丹と俺の家だ、お前はいい加減に斎さんの家に戻れ!」

「だつて斎さんのトコに居づらじんだもん、それにこなうじ飯もまこねえに作つてもらえるし~」

「クーくん落ち着いて。仕事は終わつたんだし蘇芳、上に戻りなさい」

保護者2人がうろたえるのを見て調子に乗つた蘇芳さんは、ここぞとばかりに来栖さんをおちょくる。あんな恐ろしげな人をよくからかう気になれるものだと改めて彼女の肝の太さに感服していると、来栖さんの語氣がどんどん荒くなつていつた。

頑健な肉体を誇る来栖さんに暴れられでは困ると丹さんはどうにか彼を宥めつつ、妹の蘇芳さんに店から出て行くように言いつける。

「え~だつてまだこの人に相談聞いてもらひたくないよ~

「だつたら常葉くんも一緒に連れて行つて、部屋で相談に乗つてもらいなさい~」

「えつー!?

「分かった、それじゃウチに行こ」つか常葉

蘇芳さんが店内に居座るのになると、丹さんは僕を自宅に上げるという荒業で対処しようとする。憧れの丹さんのお宅に入れてもらえるという喜びと、そこが同時に苦手としている来栖さんの家でもあるという恐ろしさで僕の頭の中は混沌としていた。

椅子の上で硬直している僕を見かねて蘇芳さんは無理矢理椅子から立たせると、僕の手を引いて店の奥にある扉を開いて居住区画へと引き入れていった。

Foxy ぱーる 了

3、Pittfall

一階建てになつてゐるラング・ド・シャの建物の一階は喫茶店のフロアとキッチンで埋まつていて、丹さんと蘇芳さんそれに来栖さんの住まいになつてゐるのは一階部分だけだった。

喫茶店スペースの裏になつてゐる部分に入つた時に靴を脱ぐべきかどうか判断に迷つたが、蘇芳さんがスニーカーのままで階段を登つていくのを見て外履きのままで上がっていいのだと察し彼女の後に続く。

「事務所として使われていたものを改築したものだから、靴のままで大丈夫だよ」

「分かりました、お邪魔します」

階段を登つた先にある扉の前でも靴を脱ぐべきかどうか戸惑つていたが、先に室内に入つていた蘇芳さんが僕に一声かけてくれる。

年季を感じさせる木製の扉に取り付けられた真鍮のドアノブを捻つて入つた丹さんたちの住居は、ラング・ド・シャの店内と同じく綺麗に片付けられていた。玄関を入つた場所がリビングになつているようで、壁際に置かれた液晶テレビを囲むようにソファがＬ字に配置されている。少し窓枠が小さいことが気になつたが、もう夕方だし壁紙は染みや黄ばみのない状態で嫌な感じはしなかつた。

「適当に座つてて、今お茶を出すから」

「ありがとうございます」

壁の向こうにある炊事場にいる蘇芳さんから椅子を勧められると、僕は遠慮なくソファに座らせてもらひ。量販店で売つていそうな合成皮革のソファの上には明るい柄のクッションが敷かれていて、その庶民的な佇まいが初めて訪れるこの家でも落ち着きを感じてくれる。

「はい、ビード」

蘇芳さんは円形のトレイの上に烏龍茶の注がれたグラス2脚とクッキーなどを適当に盛り付けた皿を乗せてリビングにやつてくると、グラスと皿をやや乱雑にテーブルの上に並べていった。

仮にラニング・ド・シャの店内で同じように食器を置いたら客からのクレームがあつてもおかしくない対応で、他人事ながら僕は彼女がフロアに出ることに一抹の不安を覚える。

「そういえばお常葉つて幾つ、高校生？」

「今高一ですけど蘇芳さんは？」

「あたしは中2」

「やつぱり年下だったんだ

年齢を訊かれたので正直に答えつつ年齢を聞き返すと、案の定彼女は中学生だった。現役の中学生ならば中一病にかかるもそれほど痛々しくはないと思いかけるが、十代半ばにもなつて吸血鬼の存在を感じているような発言をするのはやはり芳しくないと思つ。

「戸籍の上では中一だけあたしホントは17歳なの、だから常葉よりも年上だよ」

…「うん、『冗談抜きに』この歳にもなつてこんな痛い発言を繰り返すことは問題だ。できることなら付き合いたくない人種の子だけど、無碍に断つたら来栖さんに何をされるか分からぬし、最悪一度とラング・ド・シャの敷居を跨げなくなりそうなので、腹をくくつて少しでも彼女を現実に引き戻すよう試みてみるとする。

「ええと蘇芳…さん？」

「呼び捨てでいいよ、あたしも常葉のこと呼び捨てにするから」

一応相手を立てて敬称を用いようとすると、自称17歳の重度の中二病患者の中学生は寛大な態度で高校生に呼び捨てで呼称することを許可する。

「それじゃお言葉に甘えて。ねえ蘇芳、君もいろいろ大変な経験をしたみたいだけどだからってお姉さんたちを困らせ続けるのはよくないんじゃないかな？」

「ま」「ねえたちを困らせてなんかいないよ、むしろ力になつているんじやないかな」

一言断りを入れると僕は込み入った家庭の事情があるにしても、それを理由に不登校になつたり奇矯な発言を繰り返したりするのはよくないから、お姉さんたちのことを考えてまともに生きてあげるよつに説得を試みる。

だが蘇芳は自信満々といった様子で自分が丹さんたちの重荷には

なつておらず、逆に今田のよしだ店が忙しくなつた時に手助けをして支えていると即答してきた。

「…それでもや、やっぱり君が普通に学校に通つてあげるほうが丹さんたちも嬉しいんじゃないかなあ」

開始早々折れそうになつた心を匕(ヒザ)か奮い立たせて、僕は自身も悩める高校生にも関わらず問題児の更生を試みる。

「常葉はなんで居心地が悪いのに学校に通うの、自分は全然楽しくないのに親の『機嫌取りのために無理して行ってんの?』

諦め半分で言つた僕の提案を聞き流すと、蘇芳は意外と鋭い切り返しをしてくる。おかしなことばかり口にしているけれど、実際のところ彼女の頭はそんなに悪くないと思つ。ただ考え方のベクトルが一般常識から若干、いやかなりずれているだけなのだろう。

「学校が楽しくないわけじゃないぞ、友達だつているし授業だつて嫌いじゃない。それに立ち回り方を間違えなければ嫌な思いをしながら済むつて分かつたし」

「やつぱり無理してるじゃない、そんな風に他人の顔色覗いながら毎日過(ハ)」しても心から楽しめる訳ないじゃん。そのうちじつかでガタが来るよ?」

「わかつたような口を利くなよ。不登校で年甲斐もなくいるはずのない吸血鬼のこと信じてこような現実とアニメの世界の区別もつかない子どものくせに!」

学校に通わず妄想の世界に逃げている自分のことは棚に上げて、

僕のことを全部見通しているよつたことをいう彼女に腹が立ち、僕は思わず感情的になつてしまつ。年下の女の子相手に情けないと思つたが、吐いてしまつた暴言はもう取り消せなかつた。

「…」「めん、やつぱり僕なんかじゃ君の相談相手にはなれない」

蘇芳の顔を見る勇気が沸かず、僕は俯いて彼女から目を背けたまま席を立つ。同級生どころか中学生にも馬鹿にされるような奴が、人生相談なんて出来るはずがなかつた。

自分の不用意な一言のせいでいきなり相談に失敗してしまい、蘇芳のお姉さんである丹さんが開いているラング・ド・シャにも来づらくなつてしまつことに今更後悔する。丹さんの柔軟な笑顔だけでなく、来栖さんの仮頂面も見られなくなると思つとなんだか寂しい気がしてならなかつた。

「ねえ常葉、あんたが言つてたクラスの人たちから白い目で見られたことつて何?」

頃垂れたまま玄関の前までやつてきた僕の背中に蘇芳が無神経な質問を浴びせてくる。

「言いたくないよ、よく知りもしない人にそんなこと教えるはずがないだろ?」

「常葉はあたしの話を聞いたのにあんたのことは教えてくれないなんてずるー」

一方的に話を聞くだけで帰るのは卑怯だと責められると、なんだか良心が咎めてきてドアノブに伸びた手を引き戻してしまつ。

「それでも言いたくない、聞いたら君だつて僕のことを変な目で見るに決まっている」

「あたしは強力な吸血鬼忠将の娘だよ、ちょっとやそつとのことじや驚いたり常葉のことを変に思つたりしないから安心して」

はつきりと蘇芳に僕の秘密を打ち明ける意思ないことを示してこの部屋から出て行こうとするが、またも彼女が口走ったおかしな発言に出鼻を挫かれてしまつ。

よく恥ずかしげもなく強力な吸血鬼なんて言葉を口に出せるものだと噴き出したくなる一方で、その恥じらいのなさが自分よりも年上で体格も大きい来栖さんに臆せずに接することが出来る蘇芳の胆力に繋がっているのではないかと思つた。

「いいからさ、あんたが隠していることをあたしに教えなさいよ」

ドアの前で立ち往生しているうちに、いつの間にか目の前に蘇方が詰め寄つていた。彼女が僕の左腕を掴んで自分に正面を向くように引き寄せると、僕はされるがまま体の向きを変えられて蘇芳と対峙してしまつ。

「もう逃げられないよ、大人しくあなたの秘密を白状しなさい」

丸顔のせいで子どもっぽく見えたが、蘇芳の身長は中学生の女子にしては低くない。底が平坦なスニーカーを履いているのに田線の高さはそれほど僕と変わらなかつた。

若干上目遣いで僕の顔を見上げてくる蘇芳の瞳の色は薄く、ぱつ

ちつと開いた眦と合わせて猫のような印象を覚える。その印象のせいで一瞬蘇芳の瞳孔が猫のように縦長に伸びているように錯覚してしまった。もちろん目を凝らしてみると彼女の瞳孔は普通の人間と同じようだ形だった。

「…僕は陰陽師の末裔なんだ。時を重ねるうちに陰陽師の役職を失うどころか禁中への出入りもしなくなつていつの間にか普通の人になつてたけど、先祖が陰陽師だつたつてことを示す家計図だけはしつかりと残つている」

蘇芳の猫のような目に見られているうちに、僕は自然と学生生活をつつがなく乗り切るためにひた隠しにしていたことを語り始めた。だが僕の話を聞いて蘇芳がどんなリアクションをするのか見るのが怖くて、視線は床に向けて彼女の顔を見ることができなかつた。

「へえ、それじゃ常葉は靈感強いの？」

「全然、幽霊や妖怪なんか見たことないし超能力が使える訳でもない。そもそもそんなもの作り話のなかだけのものに決まっていると僕は信じているのに、陰陽師の子孫ってことをダシにして周りは茶化してくる。むきになつて怒ると、念力で復讐されるとか呪いをかけられるとか言いながら散り散りに逃げていくんだ」

蘇芳の質問に対して僕は首を横に振りながら、自分に超常的な力など一切備わっていないことを告げる。いつそ本当に念力や呪いが使えたならよかつただろう。でも見たくもない幽霊や妖怪を見えるのは嫌だなあ。

「その気持ち分かるなあ。あたしも吸血鬼の娘だつて言つたらにん

にくを投げられたり、お清めの聖水とか言つてバケツで水をかけられたり、日光に当たつて灰になれつて長袖のジャージを隠されたりしたから。こっちの抱えているものを面白半分に言われるのはかなりむかつくよね~」

「そうだろ、だから僕は自分が陰陽師の末裔つてことを秘密にしているんだ。知られなければ余計なことを言われることもないから」

君の場合はそんな中二病全開な発言を公言したからであつて、自業自得と言いたい気持ちを抑えて僕は自分のルーツを明かしたくない理由を述べる。

「常葉の言い分も分かるけど、何も意地になつて隠すことはないんじゃない」

「君は他人事だと思つていてるからそんなことを言えるんだ」

人の話を聞くだけ聞いておきながら、やつぱりこの重症の中二病患者は僕の気持ちなんて考えていなかつた。蘇芳への怒りがふつぶつと胸の中で湧き上がつてくると、僕は視線を上げて彼女の顔に剣幕を向けようとする。

「だつてさ~そういうレベルの低いじめなんて今時中一だつてやらないよ? むしろ先祖が陰陽師だつてことが判明している家計図が残つてゐるつてことは常葉の家は結構いい家庭なんぢゃない。それつて社会に出て結婚とかを考える際にはちょっとした肩書きになると思うんだけど

だが現実と妄想の世界が混在しているように思えても蘇芳も女だつた。普通に学校に通つてゐる子達と遜色ない打算的な発言を彼女

がするのを聞いて、むしろ小学校時代のトラウマを引き摺っている自分が彼女よりも子どもなのではないかと思い始める。

「ほーっとしちゃってどうしたの常葉、話が済んだなり帰つていいよ。」

「…こや、やっぱまだ帰らなー」

呆然と田の前で立つて呑みしつづける僕の顔を蘇芳が覗き込んでくると、玄関の扉に背を向けたまま僕は彼女の脇を素通りしてリビングの奥へと戻り始める。

「なんで?」

「史さんたちに頼まれたことをまだやり終えてないからね、中途半端に投げ出すのはよくないからさ」

蘇芳が僕の横に並んでここに留まつとする理由を訊ねてくると、僕は横目で彼女を一瞥しながら頬まわごとを完遂する意思を告げる。

「無駄だよ、あたしは学校に行くなつてないもの」

「蘇芳、意地になつているのは君のほうじゃないか。吸血鬼の娘つてことを誇りに思つてゐるのなら周りの田を気にせず堂々とそれを公言すればいいだろ?」

「吸血鬼の忠将の娘つてことばみんなに言つてこるよ

「だったらなおさら学校に行くべきじゃないか?」

「学校に行きたくない理由は吸血鬼の娘つてことを馬鹿にされるのが嫌なことじゃない。どうでもいいことなのに、みんながそれに拘るせいであたしが嫌な思いになることが原因なの」

蘇芳も頑なに自分が学校に行くつもりがないという意思を表明するが、彼女の言葉を借りて彼女自身が自分の存在を隠して世間から逃避しているだけだと指摘する。しかし予想に反して蘇芳が学校に行きたくない理由は吸血鬼の娘と公言したせいで周囲から冷ややかな目で見られることではなかった。

確かに自ら進んで吹聴しているのだから、それをいくらネタにされても蘇芳が気に病む可能性は考えにくい。ならば何が彼女を学校から遠ざけているものなのだろうか？

「その原因って何？」

僕は彼女の足を竦ませ、丹さんたちの悩みの種になつている問題の核心に迫るために諸悪の根源が何なのかを蘇芳に訊ねる。

僕は至つて真面目な顔で彼女を直視したし、蘇芳も僕の誠意に応じるように真正面から見返してきた。

「秘密、まじねえたちにも言いたくない事をあんたに教える訳ないじゃない」

沈黙の後、僕の問いかけに対する蘇芳の回答は極めて不実なものだった。蘇芳は小ばかにするように薄くて細い舌を口から覗かせてくる。

身内の丹さんたちにも言えないような悩みを初対面の僕に打ち明け

るはずもなかつたが、自分の家系の秘密を暴露せられた身としては非常に不愉快であつた。

「人の秘密は聞くだけ聞いておいて…そつちがその氣ならひたちでも考えがある」

「わいわい、出来つ」なにミッションは断念するのが賢い選択だよ」

「君が学校に行きたくない本当の理由を話してくれるまで、僕は君の相談を続ける」

「えつー!?.」

僕が彼女を学校に行かせるという頼まれごとの匙を投げると蘇芳は考えていたみたいだけど、そうは問屋が卸さない。こっちが余人に明かしたくない秘密を打ち明けたのだから、彼女の抱えている秘密を聞き出さなければなんだかアンフェアだ。

僕が下した選択を蘇芳は全く予想していなかつたらしく、虚を突かれたようにアーモンド形の目を丸くしてこちらの真意を確かめようとしてくる。

「さて、わうと決まれば丹さんたちに相談を続けるって了承をもらつてこなくせやな」

「余計なお世話よ。それに中学生に付き纏う高校生つてキモいよ?」

「だつて君、ホントは17歳なんだろ。年下を付け回すよりはマシじゃない?」

「と、とにかくあたしはあなたが頻繁にウチに出入りするのは嫌だからね！」

「だったら実家に帰れば、そうすれば僕と顔を合わせることもないだろ？」

蘇芳自身の発言に丹さんたちの希望を合させた僕の言葉にどうとう彼女は返す言葉に詰まってしまう。散々言い負かされてきた蘇芳が満面を浮かべるのを見て、僕は彼女に一矢報いた気分になる。

そして僕は階下で仕事をしている丹さんたちに相談を続ける承諾をもらいに、蘇芳たちの住居である一階の部屋を出た。

Pitfall 了

3、Picture 11（後書き）

『ラング・ド・シャ』一杯目をお読みいただいた方には感謝申し上げます！

過去の作品よりはテンポが良くなるように心掛けましたが、次回はもつとハジけた展開になるようにしていきたいと考えております。

2杯目（二つの投稿になる可能性…）もお乞い合いで願えれば幸いです。

4、Contingency(前書き)

今回より2杯目のエピソードです。しばらく登場人物紹介に終始し、毎回新しい人物が登場する流れになつて、一人一人の掘り下げはあまりしないと思いますがご了承ください。

4、Contingency

晩秋の日暮れは早く、学校から下校する電車が最寄りの駅に着いた時にはすっかり陽は沈んでしまっていた。街灯がぽつぽつ点つていたり、家々の窓から明かりが漏れていたりするから辺り一面真っ暗という訳ではなかつたけれど、冷たい秋風に吹き付けられると妙に心細い気持ちになる。

こういう時は熱いコーヒーでも飲みながら丹さん^{まことに}の暖かな笑顔を見て身も心も温かくなろうと思いつ立ち、僕は家路から脇道に外れて行きつけの喫茶店へと進路を変える。

僕が足繁く通つている喫茶店ラング・ド・シャは自宅から徒歩5分の距離にあり、まつすぐ歩けば家の前に辿り着く道を手前の路地で曲がればすぐの所に立地している。程よく空調の利いて柔らかい光に包まれている店内をイメージしながら、足早に路地を奥に進んでいった先にラング・ド・シャの店舗はひつそりと佇んでいた。

しかし万年閑古鳥が鳴いでいるような客入りでもほぼ年中無休で営業しているラング・ド・シャの店内に今日は明かりが点いていない。結構遅くまでやつてるので店仕舞いにも早すぎる時間であつたし、今日が休みになるという話は先日店の女主人と話した時にも聞かなかつた。

都合によりしばらく休業させていただきます

優美な女性の字でそう記された入り口のガラス戸にある張り紙を見て、僕はその場に呆然と立ち尽くす。僕が懸念していた通り、ラング・ド・シャの経営状態はいつも傾いてもおかしくない状態だつた

のだ。少しでも店の延命に繋がればとなけなしの小遣いを叩いて週に何度も顔を出していたが、案の定高校生一人が店に落とす金くらいでは到底経営の建て直しが図れるはずがなかつた。

「……」

少し濃い目で入れてあるコーヒーや自家製スコーンの香ばしい香り、鼻腔をくすぐるクリーミーブリュレの焼けた臭いそして他愛もない丹さんや来栖さんとのやりとりを一度と体感できないと思いつく、僕はたまらなく寂しい気持ちになつた。

「すみません、今日はお休みなんです……なんだ常葉か^{じきわ}」

廃業してしまったように荒涼とした雰囲気のラング・ド・シャの前に忘我状態でいる僕に、背後から呼びかけてくる若い女性の声が聞こえる。振り向いた先には緩く編んだ三つ編みの少女がコンビニのビニール袋を手に提げて立つていた。

「休みって何があつたんだ、蘇芳？」^{すおう}

「何つて、まこねえとクーくんがどっちもいないんだから休みにするしかないじゃない」

「だから2人が揃つて出かけている理由はなんなのさ？」

「クーくんが副業でやつててるHクソシストの仕事の依頼が入つて、まこねえもそれについていったからだよ」

ラング・ド・シャの女主人である丹さんの妹で、現在不登校を続けている中学生の蘇芳に店が臨時休業している理由をこぢらは真面

田に訊ねたのに、彼女は見え透いた嘘をついて話をはぐらかそうとする。

「どうせならもう少しマシな嘘を吐けよ、そんな話子どもだつて信じる訳ないだろ」「…

「嘘じやないよ、科学じや解決できない」とは今もいつぱいあってエクソシストの需要はそれなりにあるんだよ。陰陽師の末裔のくせに常葉はそんなことも分からぬの?」

「陰陽師の末裔だからそんなことがホラ話だつて分かるんだよ。高度に科学が発達した現代には妖怪も陰陽師も吸血鬼も存在する余地はないんだ。おおかた丹さんたちは経営が成り立たなくなつたラング・ド・シャの廃業の手続きかなんかで忙しいんだろう?」

「お店が赤字続きなのは事実だけね、だからクーくんがエクソシストの稼ぎをその穴埋めに充てるんじゃない」

真つ赤な嘘でお茶を濁そうとする蘇芳の態度は極めて不実なものだと思うけど、虚言癖があつて妄想力が豊かな重度の中二病に罹患している彼女の戯言にムキになるのは体力と気力の浪費でしかない。

僕は辛抱強く蘇芳の妄言に付き合いながら、現実的な見解を述べて彼女から店が置かれている実際の状況を聞きだそうとする。だが蘇芳は相変わらずの「うりうり」と詭弁を弄して僕の話に真面目に応えようとしなかった。

「人をからかうのもいい加減にしろよ……」

「最近冷え込んできたよね、外で立ち話もなんだし中に入らない?」

まこねえたちが出かけてからまともに他人と話してなくさ、そろそろ誰かと話をしたいと思つてたんだよね。あたしの相談に乗るようこまこねえたちから頼まれてるんだし、ちょっと話に付き合つてよ常葉

そろそろ堪忍袋の緒が切れそうになつてきて僕は押し殺した低い声で蘇芳にことの真相を打ち明けるように迫るが、彼女は僕の恫喝など何とも感じていないうらしく施錠された入り口の鍵を解放しながら店の中で自分の話し相手になるように言つてくれる。

「…お邪魔します」

今夜は随分寒くなるらしいといつ天気予報の正当性を裏付けるよう、一際冷たい風に曝されると僕は蘇芳に誘われるままラニング・ド・シャの店内に足を踏み入れる。どうせあのまま外で話していくも埒が空きそうになく、寒いのを我慢するのも無駄になりそうだからせめて暖くらいはとらせてもらおう。

それに蘇芳が学校に通う手助けになるよう彼女の話し相手になるように丹さんたちからお願いされている義理もあるし、話している間に蘇芳が店の実情に関して尻尾を出してくれるかもしれないし。

「暖房入れたばかりだから今は寒いかもしれないけど、そのうち暖まるからそれまで我慢して。飲み物は烏龍茶でいい？」

「うん、でもできれば温かいものが欲しいな

「分かつた、レンジで温めるね」

蘇芳は手に提げていたコンビニのビニール袋を暖房の正面にある

テーブルの上に投げ出すと、キッチンに入つて冷蔵庫の中を物色すると烏龍茶のペットボトルを取り出し、コーヒーカップに中身を注ぐ。

人の話を碌に聞こうとせず、会話が噛み合わないことがよくあるけれど、時折お店の手伝いをしているせいか意外と気が利く所が蘇芳にはあつた。僕が烏龍茶を温めて欲しいと要求すると、その通り烏龍茶を注いだグラスをレンジに入れて加熱のスイッチを入れる。

数分後、蘇芳は暖めた烏龍茶の入ったカップとフロアの注がれたカップを持つてフロアに戻ってきた。

「はい、ビーゾ」

「ありがとう」

「休日割引で200円でいいよ」

「…やっぱり金はとるのかよ」

「当たり前でしょ、こつちはお店のものをしてあげただから」

丁寧に烏龍茶の入ったカップを僕の前に置いた蘇芳に礼を言うと、蘇芳はお茶代を請求してきた。溜飲が下がらない思いもするが、蘇芳が出したウーロン茶は厳密には彼女の家のものではなくラング・ド・シャという喫茶店のものなのであまり文句は言えないと感じる。

しぶしぶ財布から100円硬貨を2枚取り出してテーブルの上に置くと、蘇芳はさも当然と言わんばかりの顔で自分の懷に収めた。

テーブルの上に投げ出していたレジ袋からマカローニグラタンと肉まんを出すと、蘇芳は湯気を立てるそれらを美味しそうに頬張り始める。昼飯の弁当以来何も口にしておらず、そろそろ空腹を感じた僕にとって自分の前には烏龍茶しか置かれていないのに相手が温かい食事を食べていることは拷問に等しかつた。

「独りで食べると何を食べても味氣ないよね～やつぱりご飯は誰かと一緒にしゃなくちゃ」

「…だったら学校行けよ」

食欲をそそる香りが周囲に漂い、口の中に滲んできた唾液を飲み込んで僕は負け惜しみのような一言を呟く。それと同時にどうして蘇芳が学校に行くという単純なことに強い忌避感を抱いているのかと、僕は改めて不思議に思った。

姉が吸血鬼でその恋人はエクソシスト、自分は吸血鬼の娘という若干、いや多分に電波な発言を口にするし、他人の話に耳を貸さず自己中心的な言動を繰り返す集団生活を送る上で様々な問題点を抱えてはいるものの、蘇芳は内向的な性格ではない。

初対面で2歳年上の僕にも馴れ馴れしく接してきたことを皮切りに、普段から歳の離れたお姉さんやその恋人と関わっているせいか蘇芳は他人や目上の人間にも物怖じせずに話しかけることが出来る。

また漫画と現実の区別がついていないようなイタイことばかり口走っている割に、接客業である喫茶店の手伝いを自ら進んで引き受けていることのおかげか、場合によつては僕よりも世慣れた意見を述べることもある。

よくも悪くも自分というものをしっかりと持つており、しかも他人と関わることに恐れや抵抗を感じていないように見える蘇芳が学校に通うことに関しては消極的になるのはいまいち腑に落ちなかつた。

まあ、不登校の人気がみんな内氣で社交性に乏しいって訳ではないし、傍若無人に見える蘇芳にもどうしても我慢できないことがあるから学校への足が遠退いてしまっているのだろう。

とはいえたが蘇芳はまだ中学2年生で義務教育を受けなければならぬ年齢だし、今の世の中それなりに学歴がなければ将来的に苦労してしまう。彼女の保護者である丹さんたちだけでなく、僕個人としてもこのまま蘇芳が不登校を続けるのはいいこととは思えない。

「あのひ、蘇芳……」

「なに？ 悪いけどこれはあたしの晩ご飯なんだからあげないよ

やはり丹さんたち家族だけでなく蘇芳自身のためにも彼女が学校に行くように説得すべきという使命感に駆られて、僕は改まって彼女に話しかける。しかし蘇芳は半分ほど残っているマカロニグラタンのプラスチック製のトレーを自分の手元に引き寄せて、一口たりとそれを恵んでやる気はない」と言い張った。

「…そりゃなくて、学校に行こうよ。学校に行けば話し相手もりるし、少なくとも毎日の弁当は独りで寂しく食べなくてもいいだろう？」

「やだ、学校には行きたくない」

「どうして、君ならきっと上手くやつていけるわ。それに将来のことを考えても、ちゃんと学校に通つて勉強しておるべきだよ」

「勉強が何の役に立つの？ いくら成績が良くてもそれだけでお金が稼げる訳じやないんだよ。お勉強だけしかできない生活力のない人間になることがそんなにいいことなの？」

「そつとは言わないけれど、やっぱりちゃんとした仕事に就きたければそれなりの学が必要だ。それに勉強すらしない奴が勉強が何の役に立つかなんていつても、屁理屈こねているだけにしか聞こえないよ？」

「あたしの言つてることを常葉がどう思おつと関係ないわ。それにあたしは勉強が嫌なんじやなくて、学校つて言う仕組みが嫌いなの。あんな居心地の悪い場所に毎日いたら、きっとどうかしてしまうわ」

既に蘇芳の頭はどうかしてしまつていて、とつこみたかったが、余計に話を拗れさせる結果にしかならないとぐつと喉まで出かかった言葉を飲み込む。

「…例え学校の居心地が悪くても、ずっと家に閉じ籠もつているよりはマシじやないかな。少なくとも家の中には特定の人にはか顔を合わさないけれど、学校なら大勢の人間と関わって新しい刺激を受けることはできるんだし」

蘇芳自身が他人との関わりを求めていることは明らかだつたし、彼女は人前に出て話をする能力は充分備わつていて、だから居心地の悪さを我慢して、学校の持つメリットに目を向けるよう呼びかけてみる。

「ま」ねえやクーくん、それにお店に来たお客さんたちはあたしのことを見ちやんと見てくれる。でも学校じや誰もあたしのことを見てくれない」「…」

「そんなことないよ、きっと君のことを分かつてくれる人だつて…」

「学校の中じや、絶対に、誰もあたしを蘇芳として見てくれない。偽りのあたしを本物にして、本当のあたしを見ようともしない。それが嫌だから、あたしは学校に行きたくないの…」

だが蘇芳は学校以外の場所なら本当の自分を見てくれるのに、学校の中では誰もそうしてくれないと頑なに僕の意見を否定した。

子ども染みた言い訳だったけど、自分の上辺と本質の葛藤という蘇芳の発言にしては割合まともなことを耳にして、僕自身は彼女が嫌悪感を抱いている学校の人間たちのように蘇芳のことを誤解しているのではないかと思い始めた。

年甲斐もなく蘇芳は存在するはずのない吸血鬼や詐欺でしかないエクソシストの活動を妄信しているけれど、それは実の親と早くに離別して丹さんの家の養子として成長した彼女が抱えている複雑な事情から田を背けるための手段なのかもしれない。

蘇芳は自分の生い立ちに思い悩むせいで傍田からは見れば問題のない家庭に育つていてクラスメイトにコンプレックスを感じていることが、蘇芳がうまく学校に馴染めない要因になっている可能性は大きい。

痛々しい発言や傲岸不遜な態度で偏見の目を持つてしまったけれど、蘇芳は「よく普通の思春期の悩みにもがき苦しんでいる女の子だからこそ、学校に行くといふことに非常に大きなハードルを感じているのだと僕は思つようになつた。

「そりや 丹さんや来栖さんは小さい時から君のことを見てきたから、学校にいる人たちよりも君のことを詳しく知つてゐるわ。これからもずっと丹さんたちの傍に居続けるのなら学校に行かなくてもいいかもしれないけれど、君は本当にそれで満足なのか蘇芳？」

「それは……」

中一病を患つた虚構の世界に生きる変人というフィルターを外して、どこにでもいる纖細な悩みを抱えた女の子として蘇芳を正面から見つめながら、僕はこのまま不登校を続けることが彼女の望みなのかと問う。すると蘇芳は初めて僕の問い合わせに対する返答に窮した。

やつぱり蘇芳自身も学校に行きたいという願望も持つてゐるんだ、ならばその気持ちを行きたくないという気持ちよりも強くできる後押しをしようと思つて、僕は次に彼女に語りかける言葉を必死に思索する。

「やつと捕まえたわ、蘇芳。電話は家電もケータイも無視、メールはいつまで経つても返信してこないから直接ここに来る破目になつたじやない。多忙なアタシの時間を割かせるなんてアンタ何様のつもりー？」

僕がじつと蘇芳の顔を見据え、蘇芳が視線を横に泳がせた状態で互いに黙り込んでいると、入り口のベルがけたましく鳴り響き、女性の怒号が矢継ぎ早に飛んでくる。

狭い店内に反響する罵声を挙げた女性の方に視線が自然と向いてしまつ。ブーツの踵が床を打つ音と共にこちらに歩み寄つてくる女性の顔を僕は覗き見る。

元々量が多く長い睫毛をマスカラで更にボリュームを出した目は勝気で気性の激しそうな性格を感じさせる切れ長の形をしており、筋の通つた形のいい鼻をした顔は丹念に化粧が施されている。

しかし厚化粧でけばばしいという感じはなく、アイシャドウのラインの引き方やファンデーションの塗り方を上手い具合に抑えて自然な感じで全体の化粧の乗りを整えており地の顔立ちの輪郭を残している。そして輪郭を残している元々の顔は少々性格がキツそうであることを差し引いてもかなりの美人と言えるものだった。

ヒールの高いブーツを履いていることも合わせて、身長は僕と同じく170cmくらいありそこに見えた。高めの身長に比例して手足もすらりと長く伸びており、姿勢よく歩く姿はファッションショーのモデルのようだ。

「あおいねえ、どうしてここに？」

店の中に入ってきた美女は僕らのテーブルの前に立つと、僕と蘇芳を交互に見比べる。僕はその女性と目が合つた瞬間、彼女の霸気に圧倒されて萎縮するが、蘇芳は彼女がここにやつてきたことに驚いているものの、親しげに愛称で呼びかけた。

Contingency 了

5、Sisters

「どうして、じゃないわよ。どうせアンタはまだ駄々こねて学校に行つてないんだからと思つて、様子を見に来たのよ」

「学校には行つてるよ、」の人は学校の友だちで……

「バレバレーの嘘言つんじゃないよ、この子は北辰学園の高校生じゃない。公立校の中坊のアンタと同じ学校な訳ないじゃない」

「あうむ……さすがあつしつつちの学校の男と遊んできただけあって、制服には詳しいね」

「アンタは一言も一言も余計なのよ。とにかくこの子がクラスメイトじゃない以上、学校には行つてないんでしょ？」

「……うん」

突然ラング・ド・シャの店内に入店してきた女性は、蘇芳の吐いた苦し紛れの嘘を即座に見破つて説教を始める。女性に学校に行つているという嘘を看破されると、蘇芳はいつになく小さくなつた。

「ところでアンタ誰？ 姉さんもクーくんもいなくて休みにしている店に蘇芳と差し向かいでいたつてことはただのお密さんではないと思うけど、もしかして蘇芳の彼氏？」

「えっと、僕は……」

「蘇芳だって彼氏がいてもおかしくない歳なんだし、彼氏なら彼氏、

違うなら違うとはっきり答えたことよ。ま、どうしてしても優柔不斷で頼りないタイプには変わりないけどね

とりあえず蘇芳の恋人でないことは明らかだつたが、彼女との関係性をいまいち僕自身も把握していなかつた。自分の立場をどう答えるべきかと考えている暇も与えてくれずに、女性は僕が返答に詰まつてこることに不満を向けてくる。

「…上鳥羽常葉です。蘇芳さんとは、その、彼女が学校に行けるよう相談相手をしてこられる者です」

「相談相手？ そういえばこの間会つた時、姉さんがそんなこと言つていたわね。でも上鳥羽くんに相談を聞いてもらつている効果は全然ないみたいだけ?」

「す、すみません……」

「別に謝ることじゃないわ。蘇芳に嫌がることをさせるのは扱いに慣れたアタシでも一苦労だもの、アナタが出来なくとも何の不思議もないわ」

名前と蘇芳とは彼女の相談相手として接しているという肩書きを明かすと、女性は僕が相談に乗っている効果がまるでないことを責めてくる。切れ長の眼に一瞥されても僕は背中に冷たい汗が滲むのを感じるが、意外と女性は寛大な態度を見てくれた。

「ちょっと蘇芳、せつかくアタシが足を運んあげただんだから、ぼううとしてないで」「一ヒーくらい出しなさいよ」

「あおいねえは恋に勉強に忙しいから、すぐに帰るんじゃないの？」

「喉が渴いたの。それに寒い中歩いてきたから体が冷えちゃったわ、だから暖まるものちょうどいい」

「は～い、まつたく人遣いが荒いんだから……」

蘇芳はぶつぶつ文句を言いつてはいるものの、女性に言われた通りキッチンドコーヒーを淹れる準備を始める。蘇芳がコーヒーの用意を始めると、その女性は蘇芳が食べかけていたマカロニグラタンのトレーをテーブルの隅に押しやつて我が物顔で席に座った。

お姉さんの丹さんや強面の来栖さんでさえ持て余している感じのある蘇芳を、顎で使うこの女性は何者だろつかとちらちら盗み見しながら僕が見当をつけている視線に女性は気付いたらしく、忙しくケータイでメールを打っていた指を止めて僕を見返してくれる。

「アタシが誰なのが分からないとアナタも落ち着かないでしょ～し、一応自己紹介をしどこうかしら。アタシは切島葵きりしまあおい、こここの店長は姉であつちで「コーヒーを淹れさせているのが妹よ」

「ようしきお願ひします」

ああ、やっぱリこの人も蘇芳のお姉さんだったんだ。丹さんが蘇芳のお姉さんだと分かつた時はちょっと意外な感じがしたけど、葵さんが蘇芳のお姉さんと言わるとじっくりするのは強引な所が似ているからだろうか？

改めて葵さんの容姿を覗つてみると、顔立ちはやっぱリ血の繋がつていらない妹の蘇芳ではなくお姉さんの丹さんに似ててる。でも気の強そうな鋭い眼光は丹さんの切れ長だけど柔和な目つきと違つて

いるし、全体の雰囲気は丹さんよりも蘇芳に近い気がする。いや、むしろ蘇芳の雰囲気がすぐ上の姉さんである葵さんに似ているのだろう。

「上鳥羽くんって言つたつけ。アンタのことどつかで見たような気がするのよね、前に会つたことはないわよね？」

「ええ、多分ありません。今田葵さんにお会いするまで蘇芳さんのお姉さんは丹さんだけだと思つていきましたから」

葵さんは思い当たる節がありそうな顔で僕の風体を見回してくる。年上の美人に凝視される氣恥ずかしさで僕は少々緊張するが、葵さんはこれが初対面であると答えた。

「そりよねえ、やつぱり氣のせいかな。あ、一応断つとくけどクーくん…じゃなかつた姉さんたちとここに同居している強面のゴツい男は姉さんの恋人だけでアタシや蘇芳とは何の関係もないからね」「あおいねえは冷たいなあ。クーくんとはまこねえと一緒にここに住むまで、ずっと同じ家で暮らしてたんだから家族みたいなモンじゃない」

来栖さんは丹さんの恋人といつだけで、自分たちとは何の繋がりもないと葵さんは力説する。しかしコーヒーを運んできた蘇芳は姉の言葉を打ち消して、来栖さんは家族も同然だと訴えた。

「…クーくんは高校の時からウチに居候させていただけよ。言わばアタシたちとは大家と賃借人の関係なだけで家族なんかじゃないわ！」

「まこねえとクーくんが一緒に出て行つたのが寂しくて、あおいねえが部屋の中で声を殺して泣いていたことあたし知ってるよ～」

「な、泣いてなんかいないわよ。むしろ田の上のたんこぶがいなくなつてせいせいとした気分だつたわ」

「強がり言つちゃつて、まこねえたちが出て行つてから最初の1週間は毎日電話してたじやない」

「あれはなんていうか… そう、監視の電話よ。2人つきりになつて惚氣つけなじじやないか、ちゃんと喫茶店の仕事をしているのか確認していただけよ！」

些細なきつかけで口論し始めた葵さんと蘇芳だつたけど、そのやり取りを傍観しているうちに僕の中で葵さんの印象が変化し始めた。気安く近寄りがたい雰囲気のデキる女を意識していて僕もう感じていた葵さんだつたけど、蘇芳と喧嘩している姿は中学生の妹とそう変わらない子どものように思えてくる。

居丈高に振舞つて高嶺の花のように見せかけているけれど、本当の葵さんは感情的で軽口の一つ一つにムキになつて応戦しているようである。下手をすると妹の蘇芳よりも精神年齢が低いんじゃないだろうか。

「あおいねえは昔からまこねえとクーくんが2人きりになるのを嫌がつていたよね～もしかしてあおいねえはクーくんのことが好きなの？」

「そ、そんな訳ないでしょ～。誰があんな無愛想で口が悪くて団体がでかくてむさくるしい男なんか、あんなの全然アタシ好みじ

やないんだから

「でもさ～あおいねえに振られた男の人の半分くらいはなよなよしてて頼りないって理由だったじゃない。その点クーくんは頼り甲斐があるタフな男だよね？」

「クーくんの場合は頼り甲斐つていうよりも粗野なだけよ。おまけに姉さんには甘こくせにアタシや蘇芳には厳しいんだから」

「好きな人に優しくするのは当たり前じゃない、クーくんに優しくされたいってことはやつぱりあおいねえは……」

「つむさいわよ蘇芳！　いい加減にしないとこっちの彼に偏食の矯正でアンタが食事の度に泣いていたこととか、小学校の水泳の授業で着替えの下着を忘れて教室に戻れずにアタシが着替えを届けに行くまでずっと保健室に隠れていたこととかバラすわよ！」

「言つてる傍からバラしてるじやん、あおいねえの馬鹿！」

結構年齢差のある姉妹、しかも妹は中学2年生で姉はおそらく二十歳を越えているとは思えない低レベルな言い合いを切島姉妹は繰り広げる。しかし口論の内容は低俗でも、語気の荒さや飛び交う怒号に籠つていてる熱気は相当の激しさがあり、喧嘩している本人たち以上に部外者の僕が気圧されてしまつてて有様だった。

「照都大（しょうと）の学生の中でも優秀なアタシに向かつて生意氣な口を利いてくれるじゃない、蘇芳？」

「成績はいいけど頭は悪いってことをいい加減自覚しなよ、あおいねえ」

切島姉妹の間に一触即発のきな臭い空気が漂い始める。この会話だけでは葵さんが何を専攻しているのかは分からなければ、御門市内にある日本屈指の難関大学照都大学に在籍しているというだけで彼女は相当学力が高いということは確かだった。

その成績優秀な姉に向かつて頭が悪いと罵られる蘇芳の度胸を認めるべきか、はたまた身の程知らずというべきかはともかく、年下の子ども相手に対等の立場で喧嘩してしまつ蘇芳の言つことにも一理あるようにも思えた。

「すみません」

「何か！？」

「ひいつ！？」

切島姉妹が目に見えない火花を飛ばしあつていて、店の入り口のドアが開いて朗らかな男の声が聞こえてくる。半開きになつたドアから男が顔を覗かせてくると、切島姉妹はそちらに八つ当たり気味に剣幕を向けた。気性の激しい美人二人から鋭い眼差しを投げかけられて、男は思わず悲鳴をあげてしまう。

「兄貴……？」

「常葉……お前こんなトコで何やつてんだ？」

「何つて、行きつけの喫茶店で知り合いと話しているだけだけど……」

悲鳴をあげた男の声に聞き覚えがあつたので入り口の方に視線を向けると、入り口のドアに凭れ掛かるようにして僕の実兄で中学校の教員をしている雪人ゆきじんがそこにいた。雪人兄貴と僕は不思議そうにお互いの顔を見つめあうが、僕と話して気を軽くした兄貴は店内に足を踏み入れてくる。

「お久し振りです上鳥羽先輩。もしかしてこの子、先輩の弟さんなんですか？」

「ああ、そいつは俺の8つ下の弟で今高一の常葉つていうんだ。どうりでそっちにいる子が君の妹なんだね？」

「はい、あたしの中学生の妹です」

「知ってるよ、だつて俺は彼女の担任だからね」

「えっ！？」

うだつの上がらない風体をしているものの、兄貴も葵さんと同じく照都大学の卒業生である。葵さんと兄貴は大学が同じなだけなく、面識があるらしく葵さんは険しい表情を崩してやや謙つた態度で兄貴に接した。

兄貴と葵さんが交互に自分の下の兄弟の紹介をしていくと、兄貴は信じられない発言をする。兄貴が蘇芳の担任をしていると初耳の僕と葵さんは、揃つて素つ頓狂な声を挙げて兄貴と蘇芳の顔を見比べた。

6、Consultation

「カミオカ先生……」

「カミオカじやなくて上鳥羽かみどね。顔を合わせるのは一ヶ月半ぶりくら
いだけど、元氣そつでよかつたよ」

「学校の名簿にある住所はまこねえの実家のはずなのに、どうして
あたしがここにいると分かったんですか?」

「君の上のお姉さんと仲のいい知り合いから君がここにいるって話を
聞いてね、それで尋ねてみたんだ」

「まこねえと仲のいい人ってカンナさんのことですよね、カミオカ
先生が高校から付き合っている彼女の」

「え、まあそうだけど…とにかくして久々に面会できたんだ、
君が学校に来やすくなるように話をさせてくれないか?」

僕の実兄である担任教師の名前も正しく覚えていないことから、
どれだけ蘇芳が学校に関心を持つていなか明らかになつた。学校
の名簿上有る住所や電話番号では蘇芳に連絡がつかず、疲れを切
らした兄貴は丹さんと仲のいい自分の恋人のつてを頼つて蘇芳がこ
こに潜伏していることを探り当てたらしい。

気付くと僕は世間の狭さを知ると同時に、担任のクラスに不登校
の生徒を抱えた兄貴の苦労を垣間見る場面にたまたま居合わせてしまっていた。

「兄弟揃つてあたしを学校に行かせる説得をしようなんて、正直ちょっと鬱陶しいんですけど……」

「え、もしかして切島さんとお前は知り合いなのか？」

「店で顔を合わせた時に話をする程度にはね。それと一応丹さんと来栖さんから蘇芳さんの相談相手を頼まれているよ」

「じゃあ最近お前の言つてた少し変わった子つて切島さんのことだつたのか？」

「やつこつになるとこなるね」

「ちよつと葉^{いきわ}、少し変わつた子つてどうこつ意味よ

「言葉通りの意味だよ」

蘇芳は僕と兄貴の話を聞いて憤然とするが、むしろ少し変わつたで留めていることに感謝して欲しいくらいだった。

「蘇芳、せつかくいらしてくれた先輩、いえ担任の先生にもコーヒーに出すのが礼儀じやない？」

「別にコーヒーを出すのはいいけど……あたしは学校に行くつもりはないからね」

葵さんはついつい今まで蘇芳と子ども同士のような口論を繰り広げていたことが嘘のように澄ました態度で、大学の先輩でかつ妹の担任である兄貴にコーヒーを一杯出すよつて言つた。

蘇芳は「コーヒーの用意をすることは億劫に感じていないようだつたが、断固として登校する意思がないことを主張してキッチンに入つていた。

「散らかつておつますナドお席にビリビリ、先生」

「ゼミの後輩だった君に先生と言われるのはちょっと歯痒いなあ」

葵さんが席を兄貴に勧めたので、僕は奥に詰めて兄貴の座れるスペースを作る。兄貴はゼミの後輩だった年下の美人の前に、少し照れくさそうな様子で腰を下ろした。

兄貴が僕らのテーブルに同席して間もなく、携帯電話の着信音が鳴り始める。着うたや洒落た音楽ではなく初期設定の電子音を奏でていたのは、やはり流行に敏感そうな葵さんではなく兄貴の携帯電話であった。

「もしもしし……え、いや……そんなことないよ」

電話に出た途端、何故か兄貴の顔が引き攣り始める。微かに受話器から聞こえてくる相手の声はどうやら女性のものらしい、何やら兄貴を捲くし立てているような強い語氣であった。

「今は担任をしている切島さんの下の妹さんの所で面談をしているだけさ……うん、そう、確かに喫茶店にはいるけれど向かい合っているのは切島さんの上の妹さんで別にそういうんじゃないから……分かっているって、今度の日曜はちゃんと開けておくから、じゃ

「…もしかして今の電話、カンナさんから?」

「ああ…どうしてカンナは俺が他の女性と一緒にテーブルに座る度に毎回タイミングよく電話をかけてくるんだろう? これだけ束縛されていたら、浮気なんか出来る余裕があるはずないのに……」

兄貴の発言の内容からさつきの電話は兄貴が長年付き合っている恋人からのものだと検討をつけると、兄貴は酷く疲れた顔で弱々しく首肯する。

兄貴が高校の時から付き合っている彼女と僕も面識があり、その彼女は兄貴がこんな風に自分以外の女性と一緒に食事をしているだけでどこからか監視しているようにすぐに浮気をしていいかと電話をかけてくるのだった。

兄貴の彼女さんは悪い人ではないと思うけど、異常なほど束縛が強い所には兄貴だけでなく弟の僕も閉口している。心配しなくとも兄貴が浮気を出来る甲斐性なんてあるはずなのに、どうして杞憂を募らせるのか理解できなかつた。

「お待たせしました」

兄貴が彼女との電話で神経をすり減らしていくうちに、コーヒーを淹れた蘇芳が兄貴の前にコーヒーを置く。丁寧にソーサーを添えたカップに音を立てさせず、注がれた中身も揺らさずに置いた辺り、頑なに登校を拒んでいる学校の担任で名前すら碌に覚えていなくても、蘇芳は一応兄貴を客人としてもてなしていることは覗えた。

「ありがとう…うん、仕事の疲れが溜まつた体には沁みる一杯だね」

暖かな湯気と芳醇な香りを立てるコーヒーを一口啜ると、兄貴は

心労の原因のひとつとなつてこの教え子に労いの言葉をかけた。

「どういたしまして、それじゃあたしはこれで……」

「待ちなさい蘇芳、先生を放り出して元気こへつもりかしい？」

「……アーティスト」

「上手ことじこひの場から逃げ出すつもりでしょ、ここからこじこに座つなぞー。」

「痛つ、あおいねえお願ひだから髪は引っ張らないでー。」

冗貴に「コーヒーを出し終えると蘇芳は軽やかに身を翻して奥の扉から一階にある居住スペースに逃げ込もうとするが、妹の行動を敏感く察した葵さんは蘇芳の緩く編んだ髪を掴んで強引に彼女をその場に引き留める。

髪の毛を引っ張られた痛みで田に涙を浮かべながら、蘇芳は観念した様子で葵さんの隣に空いている奥の席に座った。

「すみません先生、ただでさえお手を煩わせてこのに愚妹がこの期に及んで余計な迷惑をおかけしちゃう」と

「いえ、お気になさりらずに…切島さんと妹さんのことをよく田にかけてるみたいだね」

「はい、この子つたら小さい頃から落ち着きがなくて生意氣で」

「自分のことを棚に上げてよくこいつよ。姫ちゃんもあたしのことをあ
こつか

「おいねえよりは聞き分けがあるって…」、「じめん[冗談ですー。」

僕や蘇芳の前では非常に横柄に振舞つていた葵さんは、大学の先輩でしかも今は妹の担任である兄貴の前では猫を被つて上品そうに取り繕つ。そんな葵さんの態度に蘇芳が辟易した様子で憎まれ口を利くと、葵さんはテーブルの下でこつそりとブーツの踵で妹の向こう脛を蹴飛ばして黙らせた。

「それじゃ切島さん、改めて話をさせてもらおうかな。『家族や俺の弟とも話を分かること思つけど、やっぱり君は学校に来るべきだと思つ。君が学校生活を送る上で問題があるのなら、出来る限り俺も担任として解決出来るよつて協力するから』

「教科書通りの言い回しですね、先生」

「蘇芳、先生に失礼なこと言つたじやないよ。先生、申し訳あります」

兄貴は一呼吸置くと、自分のクラスにいる不登校生徒に通学を呼びかけ始めた。案の定その不登校生徒は担任の話に聞く耳も持たず減らず口を利くと、生徒に代わつてそのお姉さんが担任教師に謝罪する。

「確かに額面通りのことを言われても、本当に自分のことを心配してくれているのかつて疑問に思つのは当然だよね。でも俺は担任としての義務感だけじゃなく、2人のお姉さんと知り合いつていうことも合わせて君の将来のためにも学校に来て欲しいんだ」

「兄貴……」

「先輩……」

兄貴は蘇芳の皮肉が正論であることを素直に認めるに、今度は担任教師としての責任だけではなく彼女の身内と関わりを持つ一個人としての立場も合わせて説得を試みた。

珍しく熱の籠もつた兄貴の一言に僕だけでなく、葵さんも感銘を受けたようだつた。

「口先だけでは何とでも言えるし、例え先生がまこねえやあおいねえと仲良くてもあたし個人とは担任と問題児つてだけじゃない。ほんとんど無関係な人から心配されていると言われても、実感持てないよ」

しかし蘇芳が小声で呟いた一言は兄貴の説得にほどされかけていた僕だけでなく、彼女を囲んでいる葵さんや兄貴の胸にも深く突き刺さつた。確かにまともに付き合いもない他人から心配されていると言われても、それに素直に感謝するのは難しい。まして自分が忌み嫌っている学校の関係者から言われば尚更だろう。

図太く他人の言葉に流されないようで意外と繊細な所を蘇芳が持つていて、何度も顔を合わせていううちに僕は薄々感じるようになっていた。思春期の硝子のように脆く鋭敏な蘇芳の気持ちを慮つてか、兄貴も葵さんも彼女を学校に通わせようとする姿勢が引けてしまつているようだつた。

「先生があたしのことを考えててくれるって言ってくれる気持ちはありがたいけど、やっぱり心からあたしのことを心配してくれると感じられるのはあおいねえやまこねえたち家族だけ」

「蘇芳……」

蘇芳は兄貴が自分のことを考えてくれたことに礼を言いつつ、自分の理解者はやはり身内しかいないと述べる。妹が信頼できる数少ない存在として葵さんの心境は単純に学校に行くよう勧めるだけの僕や兄貴よりもずっと複雑なはずであり、そのことは葵さんが戸惑いを浮かべている顔からも明らかだった。

「けど家族の中でもあたしのことを一番に分かつてくれるのは、やっぱ本当のお父さんの忠将ただまさだよ。だって忠将は嫌なら無理に学校に通わなくていいって言つてくれたもの」

「それは小学校に入学したばかりの話でしょ、自分の都合のいいように忠将さん的好意を解釈するんじゃない！」

「人間のあおいねえに、吸血鬼の娘のあたしの気持ちを完全に分かることはすないよ」

「だつたら姉さんはどうなのよ、アタシには出来なくとも忠将さんと同族の姉さんならアンタの気持ちが分かるんじゃない？ そして姉さんもアタシや先輩と同じようにアンタに学校に行くように言ってるでしちう？」

場の空気は蘇芳の一言でしんみりした雰囲気になりかけたが、その潮流をぶち壊したのも彼女の発言だった。同居しているお姉さんの丹さんや実の父親だという忠将という人が吸血鬼であり、自分は吸血鬼の娘などといつ妄言を言い張る蘇芳に僕や兄貴は呆れ返る。

「ま、まこねえは吸血鬼の中でも人間ぽさが抜けてない変わり者だから……」

蘇芳は父親の同胞である丹さんが人間の兄貴や葵さんと同じこと
を言つのは、人間的な感覚を失つていかない変わり者の吸血鬼だと苦
しい言い逃れをする。

「ふざけたことばかり言つてないで明日から学校行きなさい、いい
わね！」

「やだ、あたしを蘇芳と認めてくれるまで絶対に学校には行かない
わね！」

一旦は静まつた切島姉妹と蘇芳の担任である兄貴の三者面談は、
面談が始まる前と同じく姉妹喧嘩に行き着いてしまつ。息つく間も
なく延々と罵詈雑言が葵さんと蘇芳の双方から吐き出され、僕と兄
貴は暴言の嵐に圧倒されるばかりだった。

だが兄貴は年長者としての責任を感じて、切島姉妹の喧嘩の仲裁に入りどうにか2人を宥めることに成功する。だが切島姉妹の言い争いに收拾をつけると兄貴は氣力を使い果たしてしまい、結局それ以上蘇芳に登校を呼びかけることができないまま僕と一緒に帰宅の途に就いた。

「やつぱり駄目だったか…どうすれば切島さんを学校に来させるこ
とが出来るんだらう？」

「兄貴一人での偏屈な奴をどういづるのは無理だよ、丹さんた
ちに協力してもらつしかないんじやないか？」

「いや、同級生だった長女の切島さんや彼女と同棲している来栖には夏休み前に相談している」

帰り道、兄貴とともに話すのは久し振りと思いながら蘇芳をどうやって学校に行かせるかを思案しあつ。僕が兄貴一人で全部抱え込まずに、蘇芳を自宅に住まわせている丹さんと同居人の来栖さんに協力を頼むべきと提案すると、既に兄貴は彼女たちに助力を仰いでいたらしかつた。

「丹さんたちに相談しても駄目だつたの？」

「ああ。相談した当時から切島さんは学校を休みがちで、同級生だった切島さんのお姉さんや来栖もそのことを気にかけていた」

「そりなんだ」

「でも相談してからしばらくすると、来栖の奴が切島さんをパジャマのまま担いで学校まで運んでくるようになった。本人に行く気がないのなら、家のモンが無理矢理連れて行くしかないだらうって言つてな。1週間ばかりそんなことが続いたが、来栖が学校の敷地内に切島さんを置いてきても、切島さんは裸足で家まで駆け戻つてしまふだけだったからさすがに来栖も根負けして無理矢理彼女を連れてくるのは止めた」

「…来栖さんも蘇芳も無茶苦茶だな」

屈強な体格をしている来栖さんが猫の子の首根っこを摘み上げるようすに蘇芳のことを担いでいる姿も、パジャマ姿で猫のような軽やかさで家に舞い戻ろうとする蘇芳の姿も容易に想像できた。そしてそんな珍妙な行いをする来栖さんも蘇芳も、甲乙つけがたい変わり者だと僕は結論付けた。

「やつにえばや、どうして切島さんのことをみんな蘇芳って呼んでいるんだろうな？」

「蘇芳ってあいつの名前だろ、親しい人が呼び捨てにするのに何もおかしいことはないじゃないか」

「違うぞ常葉、切島さんの名前は蘇芳じゃなくて真実まなみって言つんだぞ？」

「え、それってどうこいつことだよ？」

兄貴が至極当然のことと不思議がる方が奇異に思えた。でもてつきり名前だとと思い込んでいた蘇芳という呼び名が彼女の名前でないことを聞かされると、僕は兄貴がそのことに疑念を抱いたことに合点がいく。

あいつの2人のお姉さんの名前はどうやらも色に関係するものであり、蘇芳という名前もその繋がりで自然なものと思い込んでいた。しかし実の姉妹ではなく養子らしいあいつの名前がお姉さんたちの名前と関連性を持っているのは不自然に思えてくる。

蘇芳、いや厳密には切島真実と呼ぶべきあの風変わりな少女の素性を冷静に考えてみると、いくつも腑に落ちない点があることに僕は気付く。一体彼女は何者なんだろうと疑問に思い出すと、一笑にふしていた吸血鬼の娘という肩書きに少しだけ、いくつも〇が連なった小数点以下の値が一桁増した程度に信憑性が増したような気がした。

6、Consultation（後書き）

2杯目のお話はこれにて終了。蘇芳の生い立ちや素性に微妙な伏線を張った状態で次のエピソードへの後引きをします。

3杯目のエピソードもお楽しみいただければ幸いです。

7、Boiling(前書き)

今回よつ3杯目のお話がスタートです。
蘇芳という少女の発言やその名前が全て彼女の脳内で生み出された虚言なのか、それとも部分的にでも事実が含まれているのかなどを注目しながらお付き合ください。

7、Boiling

12月、年の瀬を迎えて毎夜を問わずだいぶ気温は冷え込むようになってきた。四方を山に囲まれた盆地にある御門市^{みかど}の気候は、夏はかまどのように暑く冬は冷蔵庫の中のように寒い。一年中、夏と冬を足して2で割った気温であればこの街はとても住み易くなるんじゃないとか季節が移るつゝとに僕は思わずにはいられなかつた。

「…今日は行くやめておひつかな」

学校からの帰り道、行きつけの喫茶店の傍を通りかかると僕は一旦足を止める。吹き荒ぶ木枯らしに曝されて冷えた体を喫茶店でコーヒーでも飲んで温めたいといつ気持ちの半面、外気同様に自分の懐が非常に寒々しいことを鑑みて今日は家に帰るべきかと逡巡する。

「あの…」の近くにラング・ド・シャット喫茶店ありますか?」

懐事情が寂しくなつてゐるため諦めて家路に就こうと足を踏み出そうとした瞬間、車道側から遠慮がちに声をかけられる。横田でやちらを覗うと髪を短く切り揃えた近隣の中学校の制服姿の女の子が、少し物怖じした様子で僕に視線を向けていた。

「はい、この道を道なりに真つ直ぐ歩いていけば店の前に看板が出ているんで分かると思いますよ」

「そうですか、ありがとうございます」

僕が自分の右手にある路地を指し示しながら行きつけにしている

喫茶店までの道案内をすると、女の子は大きく体を前傾させて礼を言つ。礼儀正しいという好感を抱くと同時に、彼女は髪を切り過ぎていると感じた。

「どういたしまして、それじゃ僕はこれで」

彼女は凛々しいといつも可愛いらしさを感じのタイプだし、あまり髪を短くすると痛々しさを覚えてしまうのは失礼だらうか。そう思いながら彼女のことを見渡してることに気付くと、僕は変に思われる前に慌てて視線を逸らしてその場を去る。ひつむる。

「…すみません。もうラング・ド・シャに關することでもひとつお聞きしたいことがあるんですけど、よろしいですか？」

「なんでしょう？」

「ラング・ド・シャで働いている人の中に女の子はいませんか？ 中学生くらいの、綺麗な顔をした子なんですけど……」

一步足を踏み出した途端、再び女子に呼び止められて僕は危うく前方につんのめりそうになら。一呼吸置いて振り返ると、彼女は意外なことを訊ねてきた。

「中学生くらいの綺麗な顔の子って、蘇芳の^{すおう}こと？」

「蘇芳？」

万年閑古鳥が鳴いているラング・ド・シャで見かける顔触れはほぼ固定されており、僕が知る限り店で見かける中学生くらいの女子は一人しかいない。消去法で思い当たる人物の名前を僕は口にす

るが、その名前を聞いても女の子は聞き覚えがない様子で首を傾げるだけだった。

「えつと…君が訊いているのは店長の妹さんの切島真実さんのかな？」

「はい、そうです。もしかして切島さんとお知り合いなんですか？」

「特別親しい訳じゃないけど、知り合いと言えば知り合いかな」

「私、切島さんと中学校で同じクラスの柊野ひいらぎのと言います。担任の先生に頼まれて切島さんの様子を伺いにこけらに参りました」

僕の思い当たる少女が身内から呼ばれている愛称ではなく、正式な氏名を告げて訊き直すと女の子が尋ねてきた人物が僕の知る少女と同一人物であることが分かった。

「兄貴の奴、自分の手におえなくなつた問題を生徒に押し付けるのかよ」

「えつ、上鳥羽先生の弟さんなんですか！？」

中学校の教員をやつていてる僕の兄貴は柊野さんが尋ねてきた少女の担任でもあり、その少女は長いこと登校拒否を続けている。

どうにか彼女を登校させようと兄貴も腐心していたが、彼女は未だに登校していないはずなのに兄貴の口からその話題を聞かなくなつて気にかけていた矢先、兄貴は自分の職務を放棄して生徒にその役目を押し付けたのだと感じる。思わず兄貴の無責任さを罵る一言を呴くと、柊野さんは耳聴く僕が自分の担任の弟であることを聞きと

めた。

「ええまあ…東九条中の教員をやつている雪人の弟で常葉と言います。至らない兄が担任ですみません」

「いえ、そんなことないですよ。先生は本当によくやつてくれています」

不甲斐ない兄貴に代わって弟の僕がその情けない有様を柊野さんに謝罪する。柊野さんは首を大きく横に振つて自分の頼りない担任の弁護をしてくれた。名前すらともに覚えていない不登校生徒を持て余している一方で、少なくとも表面的には自分を慕つてくれている生徒がいるところ、僕が思つてゐるほど兄貴は駄目な教員ではないのかもしぬれ。

「ところで上鳥羽さん、切島さんは最近どうされているかご存知ですか？一ヶ月くらい前から切島さん学校を休んでいて、その間切島さんがどんな風だったのか私全然分からなくて……」

「あいつに会うのにそんなに身構えなくても大丈夫ですよ。この間も遅くまで街をぶらついていてお姉さんたちに怒られても、ちつとも反省しないで開き直つてましたから」

柊野さんが不登校をしている蘇芳への接し方に不安を募らせていたので、僕は余計な気遣いは無用と助言した。深刻な悩みに苛まれて学校を休むしかない状況に追い込まれている人間が行きずりで出会った女子高生と意氣投合して夜中までカラオケをしているはずがない、一般的な不登校のクラスメイトに対して必要な配慮など一切不要だと柊野さんの肩の荷を軽くしてあげよつと思つた。

「失礼ね。あれだけクーくんに怒鳴られて、家出したんじゃないかなと心配してたまこねえに泣きつかれたら少しは反省したわよ」

「蘇芳！？」

柊野さんが兄貴に押し付けられた妄言を垂れ流す自由気ままな同級生の相手をしなければならない境遇に同情すると、批判の槍玉に挙げた少女の声がどこからか聞こえてくる。

すると向かい側の歩道から道路を横断して、肩に大き目のエコバッグをかけた緩く髪を編んだ少女がこちらに近づいてきた。兄貴が担任している柊野さんと同じクラスの不登校生徒で、ラング・ド・シャの女主人をしている丹さんまいとの妹の蘇芳だ。

「ねえこつちの人は誰、常葉のカノジョ？」

「ここの人は学校を休んでいるお前のお見舞いに来てくれたクラスメイトだろ！？」

「クラスメイト？ あ～そういえばなんか見たことあるかも」

蘇芳は怪訝そうな顔で柊野さんの顔をまじまじと覗きこむと、ようやく彼女のことを思い出したらしく手を叩く。碌に学校に行つていないとはいっても、様子を見に来てくれたクラスメイトに気が付かないなんて無礼な奴だ。

「私、柊野だけど久し振りだね切島さん、元気だった？」

「柊野…ああミチルか。うん、元気だからこつやつてお使いに出かけているよ」

「名前を呼び捨て、仲のいい友達のことが分からなかつたのか！？」

「いえ、切島さんとは今年同じクラスになるまで付き合つはありますせん」

蘇芳が柊野さんの名前を呼び捨てにすると僕は彼女のあまりの不遜さに眉を顰める。しかし柊野さんは蘇芳と知り合つたのは今年度同じクラスになつてからであり、特別親しい仲ではなかつたと首を横に振る。

「じゃあなんで蘇芳は君の名前を呼び捨てに？」

「同じクラスにさ、この子にいつも付きまとつていてる子がいてことある」とミチル、ミチルって呼んでいるのを聞いて名前は覚えたから

なるほどそういうことが、苗字よりも名前の方が耳馴染みがあるのなら柊野さんの苗字ではなく名前を連想するのは不可解ではない。

「それでミチルはどうして？」

「どうしてって、ただ切島さんのお見舞いに来ただけよ」

「なんで、あたし病気じゃないのに？」

蘇芳は健康体の自分の見舞いになぜ柊野さんがやつてくるのか不思議そうだった。病気の見舞いじゃなくて、不登校をしているお前の様子を見に来ただけだとつっこみたかったが、場の雰囲気を悪くしそうなだけなので黙つておくことにした。

「まあなんでもいいや、ここまで足労いただいた訳だしコーヒーくらい奢るわ。ウチまで案内するからついてきてよ、ミチル」

「あ、はい……」

「それから常葉、ミチルの相手をしなくちゃいけないからこれ持つて」

「え、ちょっと…？」

ラング・ド・シャは蘇芳の自宅ではなく厳密には彼女の姉とその恋人の家であったが、蘇芳は寝起きしている家まで柊野さんの案内することを申し出る。柊野さんは不登校をしている割に友好的な対応を見せる蘇芳に戸惑いながら生返事をし、蘇芳は適当な口実を見つけたのを悪用して大量の食品が押し込まれた買い物袋を僕に押し付けてきた。

今日は寄らずに直帰するつもりだったのに、結局ラング・ド・シャに立ち寄る破目になってしまったことを皮肉に思いながら、僕は蘇芳と柊野さんの後に続いて店まで歩く。

しかし肩が千切れそうなほど重さがある買出しの品を店まで運んだ礼に、店の女主人である丹さんから「コーヒーを一杯奢つてもらつたことは儲け物だつた。廃棄寸前の残り物であつても寒い中重たい荷物を担いでここまで来た甲斐はあつたと、温かなコーヒーを僕はありがたく馳走になる。

相変わらず店の客入りのはしく、僕と柊野さんの他に客はない。カウンターでコーヒーを啜りながら僕は奥の席に差し向かいで座つ

てこの蘇芳と柊野さんの様子を一瞥した。

「おこしー

「やつでしょ、見たまゝぱりとしなくてそのままいねえの作る料理は絶品なんだから」

「パーバーと一緒にお茶菓子として出されたフルーツケーキを一口食べると、柊野さんは口の中に広がる程よい甘さによって少し固い面持ちだった表情を和らげる。一言余計なことを言ことながら、蘇芳はお姉さんの料理を皿邊づけに絶賛した。

「…切島さんはお姉さんのお店の手伝いをするために学校を休んでいるんじゃないよね?」

「違うよ、あたしが学校を休んでも手伝わなくちゃいけないほど忙しくないもん」

遠慮がちに柊野さんが切り出した話に、蘇芳は素っ気無い調子で首を横に振る。

「病気してこの訳じゃないし家の手伝いをしてこむ訳でもないのな、ううして学校を休んでこむの? 自分が委員長をしてこむから持ち上げる訳じゃないけど、ウチのクラスはみんな仲いいしクラスの雰囲気そんなに悪くないと想ひたど……」

「だつてあそは本当にあたしでいられない場所だもん」

「そんなことないよ、みんなちゃんと切島さんのことを分かってくれるよ」

「セツコハミチル自身が、あたしを切島むさつと言つてゐる時点で本物のあたしを分からうとしている」

「えつと… それじゃ真実ちゃんつて呼んだ方がいい?」

「あたしは真実じやない、その名前で呼ばれるくらいなら他人行儀に切島さんつて呼ばれた方がずっとマシよ!」

柊野さんは蘇芳が何故学校に来ないのかとう理由を聞き出そうと試みるが、蘇芳はいつも屁理屈を並べるばかりで取り付く島がない。挙句の果てに柊野さんが親しみを持てるようヒトの名前で呼ぶことを提案すると、蘇芳は戸籍上の名前を自分の名前ではないと言ひ張つて相手を怒鳴りつける始末だった。

「『』、『』めんなさ』……」

「柊野さんが謝る」とないよ、むしろ謝りなげやいけないのはお前の方だ」

蘇芳は切れ長の田を険しく細めて本氣で怒つてゐるらしく、柊野さんはその剣幕に気圧されて反射的に謝罪の言葉を述べる。しかし彼女たちのやり取りを見ていても、蘇芳に非があるのは明らかで柊野さんがあいつに謝るのは間違つてゐる。

「はあ、なんであたしがミチルに謝らなくちゃいけないのよ?」
「でもたつてもいられなくなつた僕は柊野さんの擁護をするために、蘇芳と彼女の間に割つて入つた。

91

「ふざけるのも大概にしろよ。せっかく柊野さんが苗字じゃなくて名前で呼んでくれるようになんて気を利かしてくれたのに、自分が真実じやないなんてどうこうつもりだ？」

「どうせこうも、あたしは真実じやないってだけよ。役所の戸籍に登録されている名前は現世で生きていくために必要な便宜的なもので、あたしの本当の名前は蘇芳なんだから」

蘇芳は怒りの矛先を柊野さんから僕に変えて、不機嫌そうな顔で睨み付けてくる。蘇芳に邪険な目つきで見られたのは初めての経験であり、年下の女の子とは思えないくらい蘇芳の眼光には眼力があった。しかしここで圧倒される訳にもいかず、僕は毅然とした態度で柊野さんへの謝罪を蘇芳に求めた。

すると蘇芳は訳が分からぬことを口走つて自分の正当性を主張していくが、今の僕にあいつの詭弁を聞き流してやるだけの寛大さはない。このへんで一度ガツンと言つておかないとい、ますます蘇芳を付け上がらせることになつてしまつ。それは周りの人間だけでなく、あいつ本人のためにもならない。

「何が現世で生きていくために必要な便宜的な名前だよ、お前自身がどう思おうと公的には切島真実がお前の名前だ。自分が吸血鬼の娘だとか本当の名前は蘇芳だとかっていう作り話の世界に浸つてないでいい加減目を覚ませよ、この大ボラ吹きー！」

蘇芳を強制的に現状と向き合わせるため、僕は彼女が嘯いている全てが妄想でしかないと一蹴する。自分でも言い過ぎたと感じていたが、これくらい強気で接しないといつまで経つても蘇芳は学校に戻りはしない。だから心を鬼にしてきついお灸を彼女に据えることにした。

僕に一喝されて現実に引き戻された蘇芳は俯いて、自分が拠り所にしていた絵空事を粉碎されたショックに呆然とその場に立ち尽くしている。吐き通してきた妄想が崩れ去った喪失感に苛まれているのか、蘇芳の手は忙しく震えて床を彷徨っている。

そして虚空を泳いでいた蘇芳の右手が留まつた場所は僕の左頬だつた。拳を固めた蘇芳は逆上した勢いに任せて、思い切り僕の顔面を殴りつけてくる。目の前に星が瞬いたように感じながら、蘇芳の右ストレートをモロに食らつた僕はなす術もなく床に倒れこんだ。

「ウソなんかついてない！ あたしは200年近く生きている吸血鬼の忠将ただまさの娘で、蘇芳って名前は忠将と死んだお母さんが一緒に考えてくれた名前よ！ これは本当の話なのにどいつもこいつも笑い話にしか思ってくれない。結局あんたもそうやってあたしの言っていることを信じないで、馬鹿にするだけの奴らと一緒によ。そんなあなたは一度とあたしの前に顔を出すな！」

床に倒れ臥して視界が暗転したまま、蘇芳は嗚咽交じりの怒号を僕に浴びせてくる。吸血鬼の娘という点はともかく、蘇芳という愛称の由縁はありえない話ではないと朦朧とした意識の中で僕は感じる。ここまで本気で言わると、蘇芳の話は全部嘘と言い切つてしまつたことに後ろめたさを僕は覚え始めた。

「蘇芳！」

「切島さん！」

駆け足で遠ざかっていく足音と共に、蘇芳の上のお姉さんの丹さんと柊野さんが銘々蘇芳のことを呼び止めようとする。しかしバタ

ンと荒つぽくドアが閉められる音が店内に響くと、階上でじたゞたと大きな足音がした。

「ひやら僕を殴り倒し絶交を告げた蘇芳は、店の2階にある居住区画に駆け込んでしまつたらしい。蘇芳を会心させるどころか火に油を注いだだけの結果を思い、僕は強打された痛む頬を歪めて苦笑する。

やっぱり喧嘩の仲裁とか思い直せせるための説教とか、柄にもなじることをすると碌な目に遭わないみたいだ。

B O T T O M 了

8、Disclosure

「『めんね常葉くん、蘇芳のことは後でもつべおつかり」

「いえ、僕も強く言ひ過ぎましたから」

蘇芳に殴り倒された後、その場に面合わせた丹さんと蘇芳の同級生の柊野さんの手を借りて僕は引き起こされると空いている客席に座られた。蘇芳に思い切り殴られて腫れ上がった頬に丹さんからもうつた氷嚢を当てながら、僕は強がりを言つ。

小さい時から平和主義者だった僕にとって他人から顔面を殴打されたのは今日が始めてのことであり、経験のない激痛を堪えるのが精一杯で自分をこんな目に遭わせた蘇芳を恨む気持ちも湧いてこなかつた。

「切島さんのお姉さん、切島さんの言つていたことは本当のことなんですか？」

僕の向かいの椅子に所在なさげに座っていた柊野さんが、躊躇いがちに丹さんに先ほど蘇芳が口走つたことの真偽を訊ねる。

自分は忠将ただまさといつ200歳くらいの吸血鬼の娘だという話はともかく、蘇芳といつ名前は忠将といふひとと死んだ母親が一緒に考えてくれたということは僕も初耳であり、丹さんがその問い合わせにどう答えるのかと横目で様子を覗う。

「蘇芳って名前を忠将さんとあの子の『くなられた産みのお母様が一緒に考えられたのは本当のことよ。ちよつとイレギュラーなこと

があつて戸籍に登録されている名前は**真実**^{まなみ}になつていいけれど、わたくしたち家族は忠将さんたちが考えた名前で親しみを込めてあの子の「」とを蘇芳と呼んでいるわ

「切島さんのお母さんはお姉さんのお母さんじやないんですか？それに忠将さんってひとは誰なんです、話を聞いていると少なくともお姉さんのお父さんではないみたいなんですか？」

「えつと、じう説明しようかしら……」

「蘇芳は切島の家の養子で丹たちとは血の繋がりはない。蘇芳の産みの母親と入籍はしてなかつたが、切島家の娘になる前あいつを育てていたのは忠将さんだ。だから蘇芳にとつて事実上の父親は忠将さんつてことになる。蘇芳の出生に纏わる話を搔い摘めばこんなところだね？」

柊野さんから重ねて訊ねられた質問への返答に丹さんが言葉を詰まらせると、一階の居住区画に通じる店の奥に設けられた扉が開いて忠将がフロアに姿を現した。

「うん、だいたいそんな感じ。わたしの代わりに説明してくれてありがとう」「うう、」

「そんなことよりもよ、出かける支度してたら蘇芳の奴が泣き顔で部屋に駆け込んできたぞ？　あのお転婆があんな風になるなんて何があつたんだ？」

濃い陰影を刻む彫りの深い顔立ちに筋骨隆々として屈強な体躯をした男が奥から出でてくると、彼に何かされた訳でもないのに柊野さんは威圧感を覚えて身を竦ませる。

しかし丹さんせいから歩いてくる強面の偉丈夫を気安く出迎え、彼も多少は蘇芳の異変を気にかけた様子で階下での出来事について丹さんに聞き返した。

「学校の友達と常葉くんと話している時に、あの子の生い立ちのことでもうひとつ話が拗ねちゃってね。でも自分があまり触れて欲しくない話題だからって、問答無用で相手のことを殴るのはいけないわ」

「あ～だから上鳥羽弟かみとばが顔に氷嚢当てるのか、ハッ当たりされて『愁傷様さうけいじやうだな』

丹さんからつこわつき起しつたイザコザの顛末を聞かされると、僕らの近くに立ち止まつた彼は僕が腫れた頬を氷で冷やしている理由に合点がいって首を縦に振る。

「女の子のパンチ一発でのされちゃ格好つきませんよ……それよりも来栖さんくわいす、蘇芳の奴本当に泣き顔だつたんですか？」

「ああ、顔をくしゃくしゃにしかめて泣くのをなんとか堪えたまま部屋の中に飛び込んでいった。ところが上鳥羽弟、お前あいつに何を言つた？」

丹さんが高校時代から付き合つていて現在は店の一階で同棲しているという男性、来栖さんは当初痛ましそうに僕を見ていた目を細める。来栖さんから無言の圧力を受けて、僕は背中に冷や汗が流れるのを感じた。

「吸血鬼の娘�だとか蘇芳が本当の名前で真実は便宜上仕方なく使つている名前だとかいうあいつの話を全部嘘だつて言い切りました。

そしたら思つたよりもあいつのことを傷つけちゃつたみたいで…本当にすみません」

「阿呆、謝る相手は俺じゃねえだらう」

「やうですね…今からちやんとあいつに謝ります」

「止めとけ、今お前があのじゅじゅ馬の前にいっても怪我を増やすだけだ。ほどぼりが冷めるまで顔を合わせないことがお互いのためだ」

僕は素直に蘇芳に言い放つたことを来栖さんに告白する。来栖さんは意外と冷静に僕の話を聞いてくれて、今下手に蘇芳の前に僕が顔を出しても和解するビームか彼女を余計に怒らせるだけと僕をこの場に留めさせた。

「じゃあ僕はビームすれば……」

「今日は帰つた方がいいわね。蘇芳の機嫌がよくなつてきたら、わたくしから常葉くんの家に連絡するから」

「分かりました……」

今の僕が傷心の蘇芳に出来ることは何もなく、黙つてラング・ド・シヤを去ることが最善の選択であるよつだつた。

「あの…どうして切島さんはお姉さんたちの家の養子になつたんですか、なんでその忠将つて人と一緒に暮らさないんですか？」

まだ頬の腫れが引いていないので氷嚢を借りたまま帰つてよいが訊

ねようとする、それまで黙り込んでいた柊野さんが口を開く。彼女が口にした質問は僕も前々から疑問に思っていたことだった。

切島姉妹や彼女たちと懇意にしている来栖さんの間で交わされる会話の端緒から、おぼろげに蘇芳が切島家の養女になった理由の推測は出来ていたけれど、明らかなことはまだ聞かされていない。蘇芳、公的には切島真実という名前の少女に関する詳細を知つておいた方が、機嫌を損ねさせてしまった彼女に侘びる際にいいのではないかと感じて僕は聞き耳を立てた。

「忠将さんはその…夜のお仕事をされている人なの。忠将さんは亡くなられたお母様の代わりにあの子のことを育ててこられたけど、自分と一緒に暮らすことが蘇芳の成長に悪影響を与えるんじゃないかつて心配されていたわ。忠将さんは蘇芳を心から愛していたし、蘇芳も彼によく懐いていた。蘇芳を手放すべきかどうか悩んだ末に、忠将さんは知り合いだつたわたしの父の家で蘇芳のことを育ててほしいと頼んできたの。そしてわたしの父が彼の申し出を承諾して、養子としてあの子をウチに引き取つたわ」

丹さんは時折言葉を慎重に選ぶために考え込みながら、蘇芳が切島家に引き取られるまでの過程の概要を語る。丹さんが述べた蘇芳の生い立ちの大筋は僕が想像していた通りのことだった。

「でも切島さんは忠将さんってひとが吸血鬼つて言つてましたよ？」

「…それは忠将さんが普通の人とは反対に昼間眠つて夜仕事をしているのかと幼い蘇芳に訊かれた時に、冗談半分で答えたことみたいよ。忠将さんは生真面目なひとで彼が嘘を吐くはずないと蘇芳は幼心にも分かっていたから、大きくなつた今でもそれが嘘だと思っていないみたい」

なるほど吸血鬼のように昼夜逆転した生活を送っているから、忠将つてひとは幼い蘇芳の素朴な質問に対しても面白半分にそう返事をしたんだ。誤算だったのは普段嘘や冗談を言わない真面目な人が、珍しく茶目っ氣を見せたせいで思い込みの激しい子どもはそれを真に受けてしまい今に引き摺つていることだろう。

蘇芳の突飛な発言の真相としては納得いく説明だったのに、何故か丹さんが後ろめたそうな顔をしているのが不可解だったが、僕は蘇芳の生い立ちに関する話を噛み砕くことが出来て満足した。

「…子どもの時に信じたのは分かりますけど、中学生にもなれば普通はそれが嘘だって分かりますよね？」

「昼夜と夜が入れ替わった大変な仕事をしている忠将さんに育ててもらったことが、蘇芳にとっては大切なアイデンティティなんだよ。たぶん自分が吸血鬼の娘だと主張することで、あいつは夜の仕事をしているひとでも立派に子どもを育てられるってことを証明して、偏見を持っている連中の鼻をあかしてやりたいんだよ」

柊野さんは何故蘇芳が誤解を招くような発言を繰り返しているのかという理由に溜飲が下がらないようだったが、この場にいない蘇芳本人に代わって来栖さんがあいつの心中を察して代弁する。

来栖さんが推測した蘇芳が再三口にしている見え透いた嘘の裏にある彼女の想いを耳にして、柊野さんは蘇芳が単純に奇をてらつているのではないかと悟つたらしい。そして柊野さんは厳つい風貌をした来栖さんへの畏怖ではなく、奇矯な言動の裏にある蘇芳の本心を看破した来栖さんに畏敬の眼差しを向けるよつになつた。

「クーくん……」

「クーくん！？ す、すみません…でも驚いちゃつてつー……」

だが厳かになりかけた雰囲気は丹さんの咳によつてあつけなく霧散してしまつ。どう考へても強面で恵まれた体格をしている来栖さんに不釣合いな可愛らしい愛称を聞き、意図せずに柊野さんはその愛称を反芻してしまう。

「…丹、いい加減その呼び方止めてくれないか？」

「ちょっと子どもっぽいかもしれないけど、やっぱりクーくんって呼ぶのが一番しつくつくるよ」

決まりが悪そうな顔で俯いた来栖さんは丹さんのことと一緒にするが、丹さんは即座に彼の懇願を取り下げる。170cm近くある女性にしては比較的長身の丹さんよりも上背は頭1つ分高く、体の厚みは格段に上回っている来栖さんだつたが、丹さんには頭が上がらないらしくそれ以上呼び名に関して訂正を求めようとはしなかつた。

「お前ら姉妹が俺をガキっぽい呼び方してるから、蘇芳が中学生になつてもお前や葵をガキみたいに甘つたるい呼び方をしてるんじやねえか？」

「別にわたしは蘇芳からまこねえつて呼ばれるの嫌じゃないよ。葵もあおいねえつて言われるの嫌がつてないみたいだし」

「葵は言い方を直させるのを諦めたんだよ。大学に入つた頃、躍起になつて蘇芳に呼び方を変えさせよつとしてたじやねえか」

「そりだつて、覚えてないわ。それに呼び方に拘つたせいで関係が崩れる方が馬鹿らしいじゃない？」

「それでも体面つてモンがあるだらフ……」

来栖さんは子どもっぽい呼び名をされていることに愚痴を零すが、丹さんは爽やかな笑みを浮かべて彼の言い分をちらつと聞き流す。来栖さんは未練がましく恨み言を言いながらも、やはり丹さんに強くは出られなかつた。

「呼び名に拘るせいで関係が崩れる方が馬鹿らしい……確かにその通りですね、丹さん」

「……常葉くん？」

丹さんが何気なく呟いた一言は僕の胸に深く突き刺さつた。そうだよ、呼び方なんかに振り回されて険悪な関係になることはとても愚かしいことじやないか。丹さんの言葉を復唱した僕に、丹さんと来栖さんは怪訝そうな目を向けてくる。

「ところで来栖さん、最近お店にいなうこと多いですか？」「これからもしようつむづむお店にでない感じですか？」

蘇芳との関係がこのまま切れてしまつのは寂しい気がして、関係の修復に何かいい考えはないかと僕は思索を巡らせる。そしてふと浮かんだアイディアを出してみよつと、僕は最近不在がちな来栖さんには積極的に話しかけた。

「副業でやつてる実家の仕事が忙しいからしばらくは店に出たり出なかつたりを繰り返すと思うが、それがどうした？」

珍しく能動的に会話を図つてくる僕に少々違和感を覚えているような顔で、来栖さんは期待した通りの返事をしてきた。

「丹さん、来栖さんがいなままお店を開けるの大変じゃないですか？」

「やうね…やつぱりお酒やお茶の時間、それにお休みの日はわたし独りでは手が回らなことがあるわね」

「やうですね、そこでお2人に一つ提案があるんですけど……」

自分でこんなことを申し出るのは意外でらしくないと感じながら、僕は何かに突き動かされるように丹さんと来栖さんに思いついた提案を告げる。

突然こんな提案をしたといひであつたと却下されても不思議ではないと思っていたが、予想に反して店の女主人の丹さんも彼女に付き添つてキッチンの仕事をしている来栖さんも好意的に話を聞いてくれた。

「常葉くんのお話を受けてもいいかな、クーくん？」

「ああ、これで俺も後ろ髪を引かれずに副業に専念する」とができる

「る

「それじゃ常葉くん、お願いしてもいいから？」

「はい、喜んで」

丹さんたちから幸先いい返事をもらえたと、僕は会心の笑みを浮かべて彼女たちに頷き返す。前途多難になりそうだけど、これで蘇芳との間に入った亀裂の修復に向けて一步前進できたよって感じた。

Disclosure 了

9、Working

週末の昼時、普段はまばらな客入りのラング・ド・シャもテーブル席が埋まるくらいには繁盛している。開店してからしばらくは一組も客が入らなかつたので時間の流れが非常に緩慢に思えたが、昼前から客が入りだすと途端に店内の空気が変わつて非常に慌しいものになる。

仕事内容の詳細は不明だが副業のために店を休んでいる来栖さんに代わつて調理の担当をしている丹さんは、いつものおつとりした物腰とは打つて変わつて機敏にキッチンの中を往来していた。

客席で見ていた時は造作もない作業をしていくように思えていたラング・ド・シャの切り盛りが、視点が変わると非常に忙しく的確な行動が要求されるのだと感じる。

「まこねえ、独りじゃ大変だろ? 手伝おつか?」

店の2階に居候している丹さんの妹で中学生の蘇芳が、居住区画に通じる店の奥の扉から顔を覗かせる。不用意な発言で蘇芳の機嫌を損ねて絶交を告げられて以降、彼女の顔を見るのは始めてだった。

横目で垣間見た蘇芳の顔は絶交を宣告される前と変わつていよいよつに思えて、僕の吐いた暴言を彼女が深刻に引き摺つていなうこと胸を撫で下ろす。

「大丈夫よ、人手は足りているから」

「クーくんがいないんだから今お店にはまこねえしかいないでしょ

？」

「ええ、でも今日からバイトの子に入つてもうつてこるのは？」

「バイト？」

不在の来栖さんの穴埋めをしてこるバイトの姿を求めて蘇芳がドアの隙間から店内を覗き見てこるうちに、僕と彼女の視線が重なった。

「…バイトってやつのこと?..」

「やうよ。働くのは今日が初めてなの」と常葉くんはよくやつてくれるから助かるわ

「家で洗い物とか飯の支度をさせられていきますからね、こいつのは慣れてるんですよ」

蘇芳に剣呑な眼差しで睨まれる一方で、丹さんはバイト初日にしては僕の働きぶりはいいと褒めてくれる。僕は丹さんの労いの言葉に謙遜しながら、客のテーブルから空いてこいる食器を下げてキッチンへと運んでいった。

「なんでバイトなんか雇うのよ、人手が要る時はあたしが手伝えばいいじゃない!..」

「中学生でお店の仕事をさせる駄にはいかないでしょ?」

「あたしを働かせれば無駄なバイト代もかからないのよ、赤字続きのお店にはそっちの方が得じやない!..」

「家族に手伝わせると馴れ合いで半端な仕事になりそつだもの、バイトでもお給料を払う以上はしっかり働いてもらひつわ」

「だったらあたしをバイトで雇つてよ」

「駄目よ、戸籍上は生産年齢人口に含まれない蘇芳を雇つたら法律違反になつちゃうもの」

蘇芳は店の中に入つてくるなり、僕がラング・ド・シャでバイトしていることに文句をつけてくる。しかし蘇芳が僕をクビにして代わりに自分を働かせるように再三要求しても、丹さんはやんわりとした口調でしかし内容は厳しくそれを拒否した。

「とにかく常葉くんをバイトに雇つた以上、あなたにお店で働いてもうひつ必要はないわ。お客様としてここに来たんじゃないのなら、おとなしく上に戻りなさい」

「…わかつたわよ。それじゃ、あたしを追い出してまで雇つたバイトがどれだけ使えるかお客様の立場から審査してやひつじやないの」

丹さんからこれ以上ラング・ド・シャで自分を働かせるつもりはないことを宣告させると、蘇芳は自分の代わりに入れたバイトの僕の仕事ぶりを吟味すると答えた。空いているカウンター席に少々もつたいぶつた態度で腰掛けると、棘のある眼差しで傍らに控えた僕を一瞥する。

「こひつしゃいませ。メニューはお手元にありますので、こ注文が決まり次第声をおかけください」

「表情が硬い、それからお冷とおしほりを置く場所が遠過ぎや」

お冷を注いだグラスを使いきりのウナギティッシュを持っていた、蘇芳は細かい点に難癖をつけてきた。バイト初日なんだから仕方ないだろうと思いつつ、これから仕事を続けていく上で貴重なアドバイスとして受け止めることにした。

店のユーニフォームとして支給された、胸元に舌を出した猫のイラストが印刷されたエプロンのポケットからメモとペンを取り出すと蘇芳に指摘されたことを即座に書き留める。

「店が混み合っている時にフロアでまわるとするな、メモは暇になつてから書け」

「ちょっと蘇芳、常葉くんは同じannisをしないようになつてあなたに注意されたことを忘れないように書き取つてあるのよ。なんでもかんでもこちやもんをつけるのはやめて」

「…すみませんでした」

丹さんは僕が仕事に前向きに取り組んでいるからこそ敢えてこの場でメモを取つたのだと蘇芳を咎める。だがピークは越えたとはいえたまま店の中はお客様で賑わつており、メモを取る暇があれば代えのお冷の準備でもしておけばいいだつたかもしれない。

僕は真摯に蘇芳の忠告を聞き入れることにして、彼女に対しても頭を下げて謝罪した。

「すみませんでしたじゃなくて、申し訳ありません。それとお辞儀する角度が浅いし、頭を起こすタイミングが早くてなんかおざなり

に見える

しかし僕の謝意に対しても蘇芳は執拗に文句をつけてきた。丹さんや来栖さんといった常勤のスタッフや年長のお客さんから言われるならともかく、年下の中学生に言われると無性に腹が立つた。僕は平身低頭の姿勢を保つてはいたものの、生意気な口を利く蘇芳の態度に苛立ちを覚えて歯軋りをしてしまった。

「ま、バイトの高校生、しかも今日働きだしたばっかりのペーペーじゃ仕方ないわね」

そろそろ堪忍袋の緒が切れ掛かっている自分をどうにか抑えようとしていると、蘇芳は若い新人のバイトでは避けがたいミスだと態度を軟化させる。意外な発言に僕は思わず視線を上げて、蘇芳の顔を見上げた。

「ちょっと突つ立つてないでお冷のおかわり持つてきてよ。お昼はかきいれ時なんだから遊んでいる余裕なんかないのよ?」

「はい、すぐにお持ちします」

つつけんどんな口調は変わらなかつたが、少しだけ蘇芳が僕を見る目が柔らかくなつたように感じた。調理を終えたオーダーが上がつて、これから何組かに配膳しに回らなければならず蘇芳の言つ通り、動きを止めている暇などない。

僕は蘇芳に愛想よく返事すると、溜まってきた仕事を捌きにかかりた。

* * *

午後1時を回ると次第に客足が引いていき、再び店内に静寂が訪れる。戦場のような慌しさ、というはこさか大仰だとは思うけど、仕事初めに迎えた最初のランチタイムは僕が知る限りではラング・ド・シャにしては繁盛した方であり、正直に言つと僕はたった数時間の労働でかなり疲れていた。

「ねえ、ブレンドでいいからコーヒーお願い」

フロアが落ち着いている、というか蘇芳以外に客がない間に、洗い場に溜めてしまつた食器を片付けようとすると蘇芳がカウンター越しにコーヒーを注文してくれる。

「黙りました。丹さん、ワン・ブレンド入ります」

「まじねえじやなくて常葉、あんたにコーヒーを淹れてほしいの」

この店のコーヒーは汲み置きではなく、1杯」とに淹れてお客に出している。今日のところは配膳と洗い物、それと簡単な調理補助だけでいいと言っていたので、丹さんにブレンドコーヒーを淹れてもらえるよう頼む。すると蘇芳は丹さんではなくて、素人の僕にコーヒーを淹れるように注文してきた。

「でも僕はまだ……」

「あたしはあんたの淹れたコーヒーを飲みたいの、客の注文に口答えるするな」

働き始めたばかりの自分がコーヒーを淹れられないと蘇芳に侘びようとするのを、彼女は立場を盾にして強引に要求を押し通そうと

して遮る。

「丹さん、どうします？」

「いいんじゃない、他のお客様よりも顔見知りでわたしの妹なら初めてのドリップを少しあは氣楽にできるんじゃない？」

丹さんに助け舟を求めるように僕は視線を投げかけるが、彼女はあっさりと蘇芳の注文を聞き入れることを承諾した。

「分かりました、」注文された通りコーヒーを用意させてもらいます」

蘇芳がどんな意図で僕のコーヒーを飲みたいと言ったのかは定かではないが、お密さんからの注文でかつ雇い主の丹さんが了承したのだから僕はそれに従うしかなかつた。

自宅では何度もコーヒーを淹れたことがあるけれど、商品としてお密さんに出すのは初めての経験であり、僕は丹さんの指導に従いながらコーヒーを淹れる準備を始める。

「ぐら一杯ずつ抽出するといつても、毎回豆を挽くのは面倒なのである程度の量は予め挽いておいてすぐに淹れられるように気密性の高い容器にストックしてある。容器から一杯分の量を電子秤で計量しながら取り出すと、ドリッパーにセットしておいたペーパーフィルターに入れる。

自宅ではフィットしやすいようにフィルターを濡らしてドリッパーにセットしていたが、それでは熱の逃げ場が失われてしまい豆の風味が劣化してしまうリスクがあるということでラング・ド・シャ

では乾いた状態でフィルターをドリッパーにセットしていた。

フィルターに粉末状になつたコーヒー豆を投下すると、ドリッパーを抽出されたコーヒーを溜めるガラス製のサーバーの上に重ねる。コーヒーを抽出する準備を整えた後、フィルター内に収まつたコーヒードラッパー豆の中心にスプーンでお湯を注ぐための溝を作り、

「…あんたはさ、やつぱりあたしのことを嘘つきだと思つてゐ？」

ポットから内部のお湯が沸騰していることを告げるリズミカルな音が聞こえてくると、僕はコンロの火を止めるために取っ手に手を伸ばした。すると蘇芳が僕らの不和の原因になつた時の話を蒸し返していく。

「それは……」

「いきなり吸血鬼の娘とか言われても普通の人は信じるはずがないよね。でも陰陽師の子孫のあんたなら、そんな話にも免疫があつてまともに話を聞いてくれるかもつてあたし期待してたんだ」

「…」めん、いろいろと期待を裏切るようなことばかり言つて

「いいよ。最初に会つた時、自分には靈感が一切ないし幽霊も妖怪も信じていないつて常葉は公言していたもんね。陰陽師の末裔つてのは肩書きだけで、常葉は『よく普通の人だつてことをあたしもちゃんとわかつてなかつたから

コンロの火を消すと僕はしばし間を置いて、ポットの中のお湯がコーヒーを抽出する適温まで水温が下がるのを待つ。その間、僕と蘇芳の間で互いの肩書きに關して思い違いがあつたことを悔いる会

話が交わされた。

「常葉くん、もひお湯を注いでもいいんじゃないかしら?」

「あ、はい」

会話が途切れで僕と蘇芳が黙り込んでいたと、丹さんが間を取り繕つようにドリッパーにお湯を注ぐ頃合いだと教えてくれる。僕はコンロの上からポットを上げると、フィルターの中心に空けた蓬みにお湯を注入し始めた。

お湯を注がれると粉末状になつたコーヒー豆がフィルターの中で膨らんでいく。まんべんなくお湯が浸透し、ドリッパーの口きりぎりまでコーヒー豆が広がると僕は一度お湯を注ぐのを中断してしばらくコーヒーを蒸らすことにしてしまった。

次第にフィルターに溜まったお湯が抽出されてコーヒーになつていき、ドリッパーの下に置かれたサーバーの中に琥珀色の液体が芳ばしい香りを立てて溜まつっていく。

「あのさ、蘇芳って赤っぽい色のことだつか?」

「赤といつぱりは紫に近い暗い色かな、それがどうしたの?」

「特別どいつもて訳じやないけど、エレガントな感じの名前だなって思つただけ」

「着物の裏かさなの組み合あわせせもあるし、お母さんと忠将ただまさもあたしに高たかに美うつくしさを持つてほしこと思つて考えててくれたみたいよ」

「2人とも拘りと願いを込めて君の名前を考えたんだね」

「名前をちゃんと考えてただけじゃないわ、お母さんがあたしを産んですぐ死んじゃった分まで忠将は一生懸命あたしのことを育ってくれた。あんないいお父さん、そういうこやしないわよ」

再度ドリッパーにお湯が注げそうになるまでコーヒー豆が萎むのを待つている間、盗み見した彼女の顔からその名前を連想したことがきっかけで、僕らの会話は自然と弾んでいく。蘇芳は自信ありげな様子で、自分の育ての親である存在のこと話を語つた。

「蘇芳って名前を考えてくれた忠将さんのことを、君は本当に好きみたいだね」

「うん、今は離れ離れになつていてるけどあたしは忠将のことが大好き。あ、もちろん戸籍上の父親である斎さんにもいっぱいお世話になつているし、感謝してるよ。そんなにめぐくの父親を知つててる訳じやないけど、忠将と同格にできるのは斎さんくらいだね」

年頃の娘にしては珍しく蘇芳は父親に当たるらしさで忠将さんへの好意を素直に認める。それでは現在の戸籍上の父親のことは嫌いなのかと丹さんが寂しげな顔を浮かべるのに気付くと、蘇芳は慌てて丹さんの実父で自分の義父への感謝の気持ちを示した。

そうしていいひづりにフィルターの中で萎んだコーヒー豆の中に、僕はお湯を再び注入する。一度目よりは大人しい膨らみ方をしたコーヒー豆にお湯を注ぎ終えると、僕はカップを温めるために注いでおいたカップの中のお湯を捨てて給仕する準備を整える。

「お待たせしました」

サーバーに充分な量のコーヒーが溜まると僕はドリッパーを外して、コーヒーカップに出来上がったコーヒーを移し変える。ビールとは違つて、カップの淵いっぽいになみなみと注ぐのはエレガントではなく七分皿くらいの高さに留めておく。

ソーサーにコーヒーを注いだカップを置き、スプーンをソーサーの上に添えるとカウンター越しに蘇芳の前に完成したコーヒーを置いた。仕上げにミルクピッチャーに入ったコーヒーフレッシュをソーサーの脇に並べて配膳終了。

「… いただきます」

小声でそう呟いてから蘇芳はカップを持ち上げる。売り物として初めて淹れたコーヒーに蘇芳が口をつけたのを僕は固唾を飲んで見守る。

先ほどのように悪し様に扱き下すことはないだろうナビ、今の僕らの関係はお客様と店の店員だ。シビアな意見を突きつけられても、僕に文句を言つ資格はない。

「苦…まごねえやクーくんが淹れるのよりも味が濃いよ」

「うー、うめえ……」

「うーめんじゃなくて申し訳ありませんでした。でも眠気覚ましこはちょうどいいし、今日はこれで許してあげる。次はもつと上手くいれなさいよ」

蘇芳が眉間に皺を刻んで丹さんや来栖さんと違う味になつてしま

つたと言つと、失敗してしまつたと僕は肩を落とす。しかし機嫌を持ち直したらしい蘇芳は、幾分味が濃くなつた「コーヒー」を寛容に受け容れてくれた。

「わかりました、今度は満足してもらわるよつたコーヒーを淹れます」

「今度は期待を裏切らないでよね、新人のバイトさん？」

「はい、必ず期待に応えてみせます」

蘇芳は挑戦的な眼差しで僕の顔を見上げてきた後、アーモンド形の目を細めて世話の焼ける子どもに向けるよつた微笑みを浮かべる。そんな態度をされても僕は不思議と蘇芳に対しても生意氣とか居丈高という感情は抱かずに、素直に彼女の笑みを可愛らしいと感じて笑い返した。

蘇芳は僕が自分の姉の店でバイトすることを容認してくれたらしく、どうにか亀裂の入つた関係の修復は出来たようだと僕は一安心した。

9、Working（後書き）

ギスギスした雰囲気になつた3杯目ですが、どうとか常葉と蘇芳の決定的な離別は回避することができました。

3杯目のエピソードまで導入部としての段落はつき、4杯目からは少しずつ物語を展開させていくと考えております。

常連客ではなくバイトに鞍替えした常葉は店を取り巻く人々どう関わっていくのか、蘇芳はいつ復学するのかなどに注目しながら今後もお楽しみください。

10、Garage (前書き)

第1幕のまとめ的な閑話です。1～3杯目に登場したキャラクターとその類縁者の総括をして、第2幕の展開に繋げるためのインターバルです。

人物相関図の整理にお読みいただければ幸いです。

僕がバイトしている店は御門市南部にある住宅地の中にひっそりと建つていて、決して提供する料理の味やサービスの質も低くはないこの店で万年閑古鳥が鳴いている一因に、軒を連ねる民家の間にこの店があまりにも自然に溶け込んでしまっていることがあると個人的に考えている。

住宅地の家々の中に埋没するようにして店を構えている喫茶店ラング・ド・シャは慎ましやかに、辛辣な表現をすれば商売つ気がなく営業を続けている。

集客の見込める土日祝日を基本に人手が要りそうな時だけ頼まれるラング・ド・シャでのバイトはそれほど忙しいものではなく、憚らずに言えばもう少し働くなければ罰が当たるのではないかといふくらい暇な仕事だった。

今も日曜の昼下がりだというのに店内には顔馴染みの客が一組しか入っておらず、その客も我が物顔でテーブルに陣取つて話し込んでいるばかりで一向に注文をする気配がなかった。

清掃は30分ほど前に済ませたばかりの上、開店してから今日はまだ一度も注文が入っていないために食器棚や冷蔵庫の中は整然としており、当然厨房のゴミ箱には塵一つ入っていないのでゴミ出つの必要すらない。

柔らかな日差しが差し込み程よく空調の利いている店内で何もすることがないせいで僕は眠気を感じた。しかしバイト代は安いとはいえ、一応お金をもらつて仕事をしているのだからどんなに暇でも気

を緩めてはいけないと自分に言い聞かせた矢先、僕の隣から氣の抜けた欠伸が聞こえてきた。

「そんなに大きな欠伸をしないでくださいよ、丹さん^{まこと}」

「ごめん常葉くん、今お客さんはあの子たちしかいなからいいかなって思つたんだけど……」

「…」の店の主人は丹さんがそう思つのなら、バイトの僕がとやかくこう筋合にはありませんよ」

ラング・ド・シャの女主人をしている丹さんが茶目っ気のある態度で悪びれてくれる、僕は暢気な雇い主をこれ以上諫める氣を失くした。

丹さんは二十代半ばで小さくてもお店の経営者でもあるのに、年頃の女の子のような恥じらいをよく見せる。年甲斐もなく頼りないと言つてもいいんだろうけど、それを棚上げにしているような甘えは感じられないし、丹さんの不器用だけど誠実な人柄が表れているようだ。不思議と嫌な感じはない。

今みたいに店長として至らない点を見ても、丹さんの少し困ったような笑みを見る度に僕は毒氣を抜かれてそれほど彼女のことを責められなかつた。

「すみません、オーダーお願いします」

「はい、今お伺いします」

唯一テーブルに着いている客たちがよつやく注文するようになる

と、丹さんは伝票を持って注文を聞きに行く。

あの客たちのことだから多分ソフトドリンクを注文くるだろうし、製氷機の氷を減らすいい機会だ。あるいはケーキと一緒に温かい飲み物を頼んでくるかもしだい。そうなれば最近気になつてingのケーキの売れ残りも防ぎやすくなるからそれでもいい。

客から注文を聞いて丹さんがキッチンに戻つてくるまでの間、そんなことを考えながら次の作業を想定していると入り口のドアが開いて店内に入つてくる人影があつた。

「いらっしゃいませ…あ、来栖さん」

「お帰り…クーくんその傷ビビッしたのー?」

新しい来客かと思つて出迎えようとしたが、中に入つてきたのは古株のキッチンスタッフ来栖さんだった。大股で奥に向かっていく来栖さんを丹さんは愛想よく出迎えるが、頭一つ分高い位置にある彼の顔を見て彼女は驚きの声をあげる。

ガラス戸から差し込んでくる逆光が強烈で見落としてしまつたが、来栖さんの左頬は擦り剥けて血で汚れていた。店に戻つてくるまでに血止めをしたようだが、傷口からはまだに血がじくじくと滲んでいる。

190cm近い長身で体格もよく陰影を濃く刻む彫りの深い顔立ちをしている来栖さんがそんな風に顔を負傷していると、俄かには近寄りがたい異様な凄味を感じずにはいられなかつた。

「仕事先でちよつと、な

「すぐ手当しなきゃ！」

来栖さんは怪我をした経緯を適当にほぐらかうとするが、丹さんは彼の左頬の傷を不安げに見上げると彼の腕を取つて店の奥にある居住スペースへと引っ張つていく。奥の壁に設置された扉を押し開けると、丹さんに手を引かれたまま来栖さんはそのまま向こうへと消えていった。

「……切島さん、来栖さんってこの店以外にどんな仕事をしているの？」

「ん~ちよつと説明しこ��이仕事なんだよね~」

「説明しこ��이…やっぱり人に言えないような悪いことしているの？」

「ううん、クーくんが他所でやつている仕事は悪いことじゃないし、むしろみんなのためになることじゃないかな」

「…結局来栖さんは何の仕事をしているの？」

「まあ、平たく言えばエクソシストかな」

来栖さんの顔の怪我を見て、髪を短く切り揃えてボーイッシュな印象を受ける中学生くらいの若い女性客が声を潜めて、彼がこの店の他についている仕事の内容を向かいに座る客に訊ねる。

質問された背中に届く髪を一本の三つ編みに束ねた中学生くらいの少女は、当初来栖さんがやつている仕事への言及を避けようとする。

しかし来栖さんが悪事を犯しているのではないかと質問をした客が疑念を抱くとその弁護のため、彼がこの店以外で行っている仕事の内容を打ち明けた。

「エクソシスト…本当にそんなことしている人がいるんだ」

「うん、御門みたいに大きくて歴史のある街にはエクソシストじゃなきや解決できない問題が頻繁に起こるし、エクソシストも副業として成り立つ訳。ま、ウチに関して言えばクーくんがエクソシストとして稼ぐ方が、本業であるこの店で働くよりもずっと儲かるんだけど」

「そ、そなんだ……」

電波なことを囁く三つ編みの少女に相槌を打つて、話を聞いてやろうという姿勢を保てるショートカットの少女の度量に僕は密かに脱帽した。いつ愛想をつかされてもおかしくないのにこうして辛抱強く付き合ってくれているのだから、その厚意に応えて学校に行くべきだと僕は三つ編みの少女を非難の眼差しで一瞥する。

「ね～常葉、まこねえ伝票持つたまま行っちゃったから、もう一回注文聞きに来てよ」

「メニューの準備をするのは丹さんが戻ってきてからでもいいだろ？ どうせ閉店まで居座るつもりなんだろ？ から少し気長に待つくらいの気遣いはしなよ」

「吸血鬼のまこねえが血を見たんだから、血の渴きを抑えられる訳ないじゃない。クーくんの血を味わってまこねえの疼きが納まるのを待つたら20分はかかるよ。身内のあたしはともかくミチルをそ

んなに待たせるのはお店として失礼じゃない?」

「…分かったよ、注文は何?」

僕と田が合つと、三つ編みの少女は注文を書いた伝票を持ったまま来栖さんの治療に行つてしまつた丹さんの代わりに改めて注文を取りに来るよう促してくる。丹さんが吸血鬼で来栖さんの血を飲むという戯言はともかく、注文を聞いた丹さんにつ戻つてくるか分からぬ状況では注文を聞き直した方が無難といつのは妥当であったので、僕はじぶしぶ注文を取りに向かつた。

「あたしはクランベリーシュイクとチーズトースト、ミチルはミルクレープとホットの紅茶にレモンをつけて」

「カシロマコマシタ

「なによ、その事務的な返事。お密にはもっと愛想よくしなきこよ

「モウシワケアリマセン」

キッチンを出てわざわざ注文を聞きに来た僕に、三つ編みの少女は注文を済ませると今度は文句を言つてくる。僕以上にこの店に深く関わつてゐるくせに密として振舞うなと言つ返したかつたが、これは堪えて大人しく相手のイチャモンを聞き流すことに徹する。

「やつぱりせ、サービス業は笑顔と愛想が一番よね~常葉にはそれが不足していると思わない?」

「切島さんと上鳥羽さんは仲良いんだし、普通のお客さんと回じように接するのは難しいんじゃないかな?」

「そんなの言い訳よ、友達だろうが恋人だろうが勤務中にお店に来たらお客様としてもてなすのが礼儀つてモンでしょ」

癪に障る三つ編みの少女の偉そうに垂れ流す口上を搔き消すため、僕はシェイクを作るために冷凍のクランベリーと牛乳を入れたミキサーのスイッチを点けるといつもよりも長めに攪拌させた。

初めは擂り潰されていたクランベリーが悲鳴をあげているような不協和音が聞こえなくなり、モーターの規則的な回転音しか聞こえなくなると僕はミキサーのスイッチを切つて攪拌された半固形状の内容物を氷の入ったグラスに注ぐ。

「こんにちは」

オープンに入れたトーストが焼きあがるまであと一分少々、この間に紅茶とミルクレー^プの用意を済ませておこうと考えていると店のドアが開き朗らかな女性の声に続いて2人組の男女が入店してきた。

「いらっしゃいませ」

「そんなんに他人行儀にならなくともいいのよ常葉ちゃん。忙しい勉強の合間に縫つてアルバイトをしているなんて偉いわ」

「…まだ受験は先のことですし、そんなんに大変つてことはないですよ。空いている席にこ自由におかけください」

入店してきた眼鏡をかけた丸顔の女性、天満さんと僕は顔見知りであり、彼女は肩肘張らずに接する許可をしてくれる。天満さんか

てんま

らいただいた労いの言葉に僕は謙遜すると、内心かなり鬱陶しかったので早く奥に行くように席を勧めた。

「窓側の席でいいよね、雪人？」

「ああ、日差しが差し込んで温かいだろうし」

「わたしと雪人の仲睦まじい姿を見れば、通りを行く人もきっと温かい気持ちになれると思つわ」

「…やっぱり奥の席にしよう」

天満さんが通りに面した窓際の席を選ぶと、連れの男性は陽気がいいので初めは快く了承する。しかし通行人に自分たちの姿を見せつけようとしている天満さんの意図を知ると、彼は彼女の手を引いて三つ編みの少女たちの後ろの席に座つた。

「もう、相変わらず雪人はシャイなんだから。でもそういうところが可愛いのよね~」

「ラブ・ラブですね、カミオカ先生とカンナさん」

「切島さんと柊野さん……」

「カミオカ先生がここでミチルと話をするようにって言つたんだから、あたしたちがいることにいちいち驚かないでよ」

天満さんと連れの男性の仲を冷やかされて、彼は自分たちの隣の席に三つ編みの少女とショートカットの友人柊野さんがいることに気づいたらしく、休日の喫茶店で教え子に居合させたことに彼は驚

くが、三つ編みの少女は相変わらず生意気な口を利く。

「へえ、蘇芳ちゃんが雪人に勉強教わっているんだ。おまけに雪人の弟の常葉ちゃんが蘇芳ちゃんのお姉さんの丹のお店でバイトしているし、世の中って狭いね～」

「ホントですよ。」こんなに行く先々の人気がつながっているんじゃ、人間関係に広がりが出にくくて面白くありません」

天満さんが愉快そうな顔を浮かべて呟いた一言に、三つ編みの少女蘇芳は皮肉めいた表情で溜息をついた。そんなに閉鎖的な人間関係が嫌ならちゃんと学校行つて、柊野さん以外のクラスメイトと関わつてこいや……

しかし遺憾ながら世の中が狭いということには僕も2人と同感である。そしてそう感じるからこそ、友人の丹さんが主人をしており恋人の弟である僕がバイトしているラング・ド・シャでお茶を飲むのを天満さんには遠慮して欲しいと切に思う。

天満さんと兄貴が席に着くまでのやり取りに気を取られてはいるが、入り口のドアにかけられたベルが鳴つてまた客が入店していく。

「いらっしゃいませ……」

「あ～お腹空いた、適当になんか作つてよ…あれ、姉さんは？」

「丹さんは怪我して帰ってきた来栖さんの手当を奥でしていますよ」

「家に帰つてこられる程度の怪我なら自分で処置させりゃいいのよ、

ホント姉さんはクーくんに甘いんだから……常葉、とりあえずスコーンとコーヒーちょうどいい。スコーンはけやんと温めて、よく泡立ったクリームをつけるのよ」

しかし来店してきたのはまた顔見知りの人物で、丹さんの妹であり蘇芳の姉の大学生の葵さんだつた。葵さんは兄貴たちが避けた窓際の席に移動しながら注文をすると大仰な態度で椅子に腰を下ろし、向かいの席に颯爽と翻していた赤いレザージャケットを無造作に投げ出した。

「常葉ちゃん、オーダーいいかしら?」

天満さんが猫撫で声で注文を取りに来るよつに僕を呼ぶ。いつもは注文を決めるまでにやたらと時間をかけるから先に蘇芳たちのテーブルにメニューを出してから注文を取りにいこうと思っていたのに、今日はやけに早く決めたせいで蘇芳たちに出すメニューもまだトレイに乗せ終わつてもいなかつた。

「ちよつと待つてください、すぐお伺いします!」

「常葉、あたしのシェイクとチーズトーストまだ~?」

「今持つてくよー!」

少々乱雑な積み方になつてしまつたが、蘇芳と柊野さんの頼んだメニューを乗せたトレイを抱えて彼女たちのテーブルに配膳に向かう。

「グズグズしないで早くコーヒーとスコーン持つてきなさいよ。これ以上血糖値が下がつたら脳の働きが鈍っちゃうわ!」

「す、すみません…少々お待ち下さい」

蘇芳と柊野さんの前にそれぞれ注文した品を並べていると、窓際のテーブルから葵さんの罵声が飛んできた。元々気性が激しい人だけど、お腹が空いているとその性質がより顕著になってしまふことをバイトの経験を通して僕は知っている。あまりメニューを出すのに時間がかかるつて葵さんの機嫌を損ねると、面倒なことになりかねない。

「常葉、俺たちのオーダーは聞かないのか？」

兄貴と天満さんには悪いけど、「」は葵さんの怒りを宥めるため彼女にメニューを出すことを優先しようとしてキッチンに戻ろうとする僕を兄貴が呼び止める。

…兄貴、どうして間の悪いことに關してはタイミングが絶妙なんだ？

「ちよ、ちよっと待つてくれないか……？」

「常葉ちゃん、わたし仕事明けでお腹減つてるんだけど…？」

「」の後ゼミで研究会があるからのんびりしてこる暇がないの、さつさと注文したもの出しなさい！」

兄貴と天満さんにもう少し待つてもらえるように懇願する目を向けるが、ラジオ局の仕事明けでそのまま「」にやつてきたらしい天満さんの眼鏡の奥の目は笑っていない。

天満さんの剣幕に氣圧されて注文を聞くくらいすぐに終わるのだ

からそれを済ませた後に葵さんの注文の品の準備をしようとするとき、葵さんがかなり苛立つた様子でメニューの配膳を急かしてきた。

「あーもう見てられないわ。常葉、カンナさんたちの注文はあたしがとつてあげるからあんたはあおいねえの頼んだものを用意してあげて。このまま放つておいたら、あおいねえがお店で暴れだしそうだもの」

アクの強い年上の女性たちに睨まれてその場に射竦められてしまつた僕を見かねて、蘇芳が仕事の手伝いを申し出てくれた。蘇芳は椅子から立ち上ると、兄貴たちのテーブルの横に立つて注文を聞いたとする。

「失礼なこと言わないで蘇芳、大人のアタシがそんなことする訳ないじゃない！」

「お腹の空いている時のおいねえは、血に飢えている吸血鬼よりも凶暴なんだからそんなのアテにならないよ～」

「ちょっと蘇芳！」

「お客様、お決まりの『注文をお伺いいたします』

キッチンに戻つてスコーンをオーブンで温め直し、冷蔵庫からスコーンに添える生クリームを器に移しつつ泡立ち具合を僕が確かめていると、中学生の妹の軽口に大学生の姉がムキになつて反論している喧騒が聞こえてくる。

確かに蘇芳と葵さんは8歳が離れていたはずだが、普段澄ました様子で居丈高に振舞つている葵さんが蘇芳と喧嘩している姿は僕ら

とさう歳の変わらない、あるいは年下の女の子のようと思えた。感情を剥き出しにして憤る姉を尻目に、蘇芳は素知らぬ顔で天満さんと兄貴の注文を聞いていた。

蘇芳に姉の怒りの矛先を自分に向ける意図があつたのかどうかは分からぬけれど、とにかく葵さんの注意が彼女に集中したことだ僕は手際よくメニューを配膳する用意を済ますことができた。

「カソナさんはカレーセットでコーヒーは食後にフレッシュショト砂糖をつけて出して。カミオカ先生はクラブハウスサンドセットを頼んだわ、やっぱりコーヒーは食後に欲しいしそうだけど何もつけずにブラックのままお願い」

蘇芳が聞いてくれた兄貴たちの注文をカウンター越しに述べてくるのを、僕は伝票にペンを走らせて書き留める。

「あおいねえのオーダーの用意できるみたいだし、あたしが持つてつてあげるよ」

蘇芳はカウンターに僕が乗せた焼きあがつたスコーンとコーヒーの乗った皿を手に取ると、葵さんのテーブルに運ぶと申し出てくれた。

「ありがと、助かったよ」

「お礼はあたしとミチルのオーダーをタダにしてくれるのでいいよ」

なるほど、気前よく協力してくれたのはそういうことだったのか……

「ちょっと待て、それはほつたくりだ」

「お姉のあたしが手伝ってあげたんだよ、それくらいのサービスはしなさいよ」

たったこれだけのことでも僕は蘇芳に2000円近くも支払う勘定になり、報酬として不当なほど割高だと僕は抗議する。しかし蘇芳は僕の訴えを無視して、スローンとホールヒーの乗ったトレイを抱えて窓際の席へと行ってしまう。

「やつと注文したものが出ってきたわね。姉さんといい常葉といい、いじのスタッフは他所のお店じゃ使い物にならないグズばっかりよ」
「ふーん、せっかく運んできてあげたのにそつこい」と言つんだ。
だったらお勘定は結構ですのでお客様、お引取りください」

メニューを持つてテーブルの前にやつてきた蘇芳を一瞥すると、葵さんは僕だけじゃなくて自分のお姉さんである丹さんのことも属る。しかし蘇芳は葵さんの漂わせる険悪な空氣にも物怖じせず、一度テーブルの上に並べた食器を回収しようと手を伸ばした。

「べ、別に食べないとは言つてないわよ！」

一口もつけないまま下げられそうになる食器を葵さんは咄嗟に庇う。

「無理に食べていただきかなくともよろしいんですよ、鈍臭い人間の作った料理なんてお客様のお口に合わないんじゃないですか？」

「…配膳の手際は悪くても、姉さんの作った料理は美味しいわ」

葵さんはお姉さんの丹さんの料理が食べたくてこの店にやつてきたことが照れ臭そうな顔をすると、窓の外に視線を逸らす。僕に向かっているので蘇芳の表情は分からなかつたが、屈折した態度を改めて本音を吐露する姉の態度を楽しんでいるのは間違いなさそうだ。

「最初から素直にまこねえの料理が食べたいって言えばいいのに、どうしてあおいねえは余計な憎まれ口を利用して相手の気を悪くさせるのかなー？」

「う、つむさいわね…用が済んだらさつさと友達の所に戻りなさい。アンタなんかに付き合つてくれる数少ない友達は大事にしなさいよ！」

ようやく食事にありつけた葵さんは、蘇芳が僕の手伝いをしていくことで友達の柊野さんを待たせていることを注意する。キツくて捻くれた性格をしているけど、なんだかんだ言って葵さんは妹の蘇芳を大事にしているんだよね。

「わかつてゐよ、あおいねえ。そうだ、ちつきの注文は常葉が奢りになるからもう一品何かオーダーしようっと」

「おー、誰も奢るとは言つてないぞ！」

「無駄口利いている暇があるなら手を動かす。カンナさんとカミオ力先生もお腹をすかせているんだから待たせちゃ駄目だよっ！」

社会人だから葵さんみたいに喚きたてることはしないし、身内の兄貴と身内になるかもしれない天満さんだけど、お客様として来ているからには注文された品を出すのを長引かせてはいけない。

蘇芳に言われた通りなのは癪だけどお客様が注文の品を待つていてる以上、彼女と言い合いをしている暇など僕にはなかつた。

「お待たせしました」

「ありがとうございます。蘇芳ちゃんは年下なのに常葉ちゃんのことしつかりお尻に敷いて手綱を取つてゐるね、わたしも見習わなくちゃ」

「見習わなくていいです、それにあいつの尻にも敷かれていません」

準備できたメニューを配膳していると、天満さんが蘇芳の横暴さに感心しているようなことを口走る。天満さんは僕と蘇芳の関係を甚だしく誤解しているし、あなたは今でも充分に兄貴の手綱を握っていますよ……

「照れちゃつて、やつぱり高校生は初々しいな、わたしたちも最初はお互いの距離を掴みにくかつたよね、雪人？」

「そう言えなくもない、かな……？」

兄貴は天満さんに氣を使って彼女の思い出話に口裏を合わせた。距離が掴みにくかったのは本當だらうけど、天満さんは学生時代から兄貴に積極的なアプローチを繰り返していて、兄貴は距離を置くことも出来ずに結局天満さんが密着された状態に慣れてしまつたというのが実情だった。

「……」

兄貴と天満さんの語らいに水を差しては悪いと感じて、僕は食器

をテーブルに並べ終えるとキッチンに戻つていぐ。キッチンに戻つて調理に使つた道具を片付けながら、兄貴たちのテーブルを一瞥するとそれなりに楽しく会話を弾ませているようだつた。

強引な所はいくらか、いや多分にあるけれど天満さんが兄貴を好きな気持ちに嘘はないと思つ。兄貴も気圧されてはいるけれど、天満さんから寄せられている想いに正面から応えようとしている。だから今も2人はこうして交際を続けているんだらう。

厚かましい所は苦手だし、いつまでも子ども扱いされる点には辟易しているけれど、僕自身天満さんのことは嫌いじゃない。明るくて活発な性格をしているし、ちょっととぼつちやりしているけれど包容力のある魅力的な女性だと思つ。実際、兄貴が不満じやなれば天満さんが自分の義姉になつても構わない。

「彼女、か……」

もうじき高校1年も終わるとしているけれど、未だに僕に浮いた話はない。兄貴はこの頃には天満さんと付き合い始めていたことを考えると、少し兄貴に対しても負い目を感じてしまつてゐる。

「常葉、フルーツパフェ一つ追加で~」

「…前の注文も合わせて奢らないからな」

「なによケチ~恩知らず~」

「こちちは奢るとは言つていないので、蘇芳の中では手伝ってくれたことのお礼として僕が食事を奢ることが決定していいようだつた。チョコパフェよりも値段の高いフルーツパフェを注文していくこと

からそう考えて間違いないだろう。

追加でオーダーしてきたフルーツパフェはもちろん、先に注文した品も奢るつもりは一切なかつたが、僕はパフェを作る準備に取り掛かる。

今後自分が異性と付き合うことになつても、妄想癖があり自己中心的な蘇芳のような相手だけはごめんだと、パフェを作りながら僕はしみじみ感じるのだった。

Garnish 了

11、Life plan（前書き）

前回に引き続き番外編。しかも今回は主役の2人は登場せず、彼らの兄や姉世代の人物のみの登場です。

常葉視点でないちょっと大人の掛け合いをお楽しみください。

11、Life plan

夜半、その日の営業を終えた喫茶店ラング・ド・シャのフロアには2組の男女が同じテーブルを囲んでいる。

男性2人が入り口側、女性2人がその向かい側という配置で着席している各人の手元に置かれたグラスにはそれぞれ異なる酒類が注がれていた。

「乾杯！」

眼鏡をかけた豊満な肢体の女性、天満カンナてんまがよく通る声で音頭を取ると、テーブルに着いている男女は互いにグラスの縁を当てる乾いた音を鳴らす。

「高校からの付き合いだけど、こうして4人で飲むのは初めてじゃない？」

「言われてみればそうだね。カンナちゃんと上鳥羽くんかみとばとは学生の時に何回か飲んだことがあるけど、その時はいつもクリーくんがいなかつたもんね」

グラスの中のカクテルを一息に飲み干したカンナの言葉にその隣に座った比較的長身で細身の女性、切島丹きりしまのこが相槌を打つ。

「切島さんと一緒にこの店を開く前は基本的に夜勤の仕事をしてたんだよな。大変だったな来栖」

「頑張った分、早めに店を開業出来たから不満はねえよ」

カンナの正面に座つた眼鏡をかけた人の良さそうな青年、上鳥羽雪人に労わると、彼の傍らで水割りの焼酎を舐めている彫りの深い顔立ちをした偉丈夫、来栖託人は感極まつた表情で自分が働いている店内を見回した。

「喫茶店を開くためのお金をほとんど出してくれたんだからクーくんには感謝しきれないよ。月並みなことしか言えないけど、本当にありがとうございます」

「感謝しているのはこっちの方さ。お前が俺を雇ってくれたお陰で少しは夜の時間に余裕ができるて、こいつやって高校の同級生と卓を囲めるんだからな」

共同でラング・ド・シャを運営している丹と来栖は感謝の意を相手に贈りながら、互いの顔を見つめあつ。

「ちょっと丹に来栖くん、久々に集まった席でいきなり2人の世界に没入しないでちょうどいい。毎晩この上で惚氣ているのによく飽きないわねえ」

「う、ごめんカンナちゃん」

自分と雪人をそつちのけで惚氣ている丹と来栖の間にカンナが口を挟むと、丹はせっかく自分たちの招待に応じてくれた親友の気を損ねてしまつたとすぐに侘びる。

「あー丹たちが羨ましいな。そつだ雪人、わたしたちもそろそろ一緒に暮らそうよ?」

ラング・ド・シャの2階は住居区画になつており丹と来栖はそこで同棲している。彼女たちの関係を羨んだカンナが唐突に同居を持ちかけてくると、雪人は危うくビールを噴き出しけた。

「そろそろつて言われてもなあ……お互全然違つた業種で働いているから顔も合わせにくい、逆に気まずい雰囲気になりそうじゃないか？」

「雪人は朝早くから夜遅くまで中学校に詰めっぱなしだし、わたしは局に出入りする時間が不規則だし確かに一緒に暮らしていくも擦れ違いは多そうね」

「せうだらう、だつたら無理に同居することはないんじやないか？」

「でもさ、少しでも相手の顔を見られればそれだけで仕事で疲れた気持ちに張りを持たせられるんじやない？」

雪人はカンナとの同棲に消極的だが、カンナは例え一緒にいられる時間は短くとも恋人の顔を拝むことで仕事を頑張ろうと思えるのではないかと前向きな検討を呼びかける。

「そ、そつかな？」

「実際のところどうなのかな、同棲してる先輩としての感想を聞かせてよ丹」

「えつと…わたしたちは仕事先も同じだから、中学校の先生をしている上鳥羽くんとラジオ局に勤めているカンナちゃんの参考にはならないんじゃないかな」

急に意見を求められて丹は驚いた様子だつた。しどろもどろの回答をする丹の顔はアルコールの酔いが回つたためか、もしくはプライベートな話題に触れられた恥じらいからか頬を赤く染めている。

「状況は違つてもさ、やっぱり好きな人と寝起きと共にするつてのは別々に暮らしていた時とは違つた刺激があつたでしょ？」

「ううん、そういうのは特別なかつたよ」

「丹のことだから父親以外の男の人と一緒に暮らし始めた頃は緊張の連續だつたんじやないかつて想像してたけど、案外冷めてるのね」

「クーくんが一緒に住むよになつた時はちょっとは緊張したよ。でもその時はお父さんも葵もいたから、親戚の人人がウチで寝泊りするようになつたような感じだつたかな」

「ちょっと待つて丹、今の言い方じやあんたの実家に来栖くんが下宿していたみたいに聞こえるけど?」

「あれ、クーくんが高校の時からウチに下宿していたこと知らなかつたつけ?」

「ええっ、それじゃあんたたち高校の頃から同棲してたのー?」

丹が素つ氣無い口調で来栖とは高校の時分から彼女の実家で共同生活をしていたことを暴露すると、その事実を初めて知らされた力ンナは仰天する。雪人も飲みかけていたビールをむせながら丹と隣で仮頂面を僅かににやけさせている来栖のことを交互に見やつた。

「うん、お店の上に住む前からクーくんとは一緒だつたから特別目

新しい」とはなかったの

「そ、そなんだ……」

色恋に関して奥手そうな丹と女性との交際には精そうな来栖がこの店の上で暮らす随分前から同棲していた事実を知ると、雪人は適当に相槌を打ちつつ自分だけ置き去りにされているように居た堪れない様子でグラスに残ったビールを呷った。

「高校の時からの付き合いでしかもその頃から同棲していく、おまけに今は一緒にお店の切り盛りをしている。もしかして今日飲みに誘つたのは2人が入籍する報告のためだつたとか？」

「ち、違うよ。久々にみんなで集まればならなつて思つて連絡しただけで、それ以外に何かある訳じゃないよ」

親友の自分も予想していなかつたほど丹と来栖の仲が親密だと知つて、カンナは婚約の発表を内密にするために今晩自分たちを呼び出したのではないかと推測する。しかし丹は更に顔を赤くして激しく首を左右に振り、カンナの推測を否定した。

「本当かしら？　まさかあんたたち、『テキてない』でしょ？」

「どうしたカンナ、もう酔つ払つてているのか？　関係が『テキてなかつたら同棲している訳ないだろ？』」

「鈍いのは雪人よ、わたしが丹たちに訊いているのは子どもが出来てないかつてことよ」

グラス1杯分のビールでほろ酔いになつている雪人は、自分より

も酒に強いカンナが今日はもう酔っ払っているのかと意外そうな顔で彼女の様子を覗う。しかしこの場にいる面子の中で一番素面の状態に近いカンナは、雪人の相変わらずの勘の悪さに呆れながら丹と来栖の間に子どもが出来てないかと問うたのだと返した。

「…子ども…？」

「アホか天満、結婚もしてねえのにガキを仕込む訳ねえだろ！」

丹と来栖は取り乱した様子で自分たちはまだそこまでいってないとカンナに反論した。

「でもさ～高校の時から付き合つてると、未だにプラーナックな関係のままではないでしょ？」「

「そ、それは……」

「多分高3いや高2の終わり頃にはやつてると思つんだよね。はつきりした時期は覚えてないけれど、ある口を境に丹がオンナの顔になつてたもん」

「なつ…？」

カンナに来栖との関係を言及されると丹は口こむる。しかし高校時代の記憶を反芻しながら丹の雰囲気が変わった瞬間のことをカンナが口に出すと、雪人は丹たちが一線を越えた時期の早さをにわかに信じられずに驚く。

「カンナちゃん、気付いてたの…？」

「えつー!？」

「3年間同じクラスで毎日顔を合わせていたからね、何となくそんな気はしてたんだ。雪人は2、3年で来栖くんと一緒にクラスだったのに来栖くんがどこか変わったように感じなかつたの?」

「い、いや……特に来栖が変わったように思えなかつたけど……」

「割と話はしてたけど丹と天満ほど親しくはなかつたから気付かんくとも無理はないさ。でもよ上鳥羽、久々に会つた時にあんたがオトコの顔になつたのに俺は気付いてたぜ?」

毎日顔を合わせて親友の間柄であつたカンナが丹の変化に気付いたのと同様に、常に行動を共にしていた訳ではない雪人が自分の変化に気付かなくても無理はないと来栖は彼の弁護をする。しかし雪人が男になったことを自分は見抜いていたと来栖は口の端を吊り上げて彼に流し目を向けた。

「どうせ高校の時に悪ぶつてたあんたは、丹とやる前に風俗か何かで筆おろしはしてたんでしょ。清く正しい青春を送つっていた雪人とあなたを一緒にしないで!」

「……最近少しは風当たりが緩くなつたと思っていたが、相変わらず俺に対する言葉は手厳しいな天満」

茹蛸のように顔を赤らめて口を噤んでいる雪人に代わつて、カンナは少々節操のないことを交えながら来栖を罵倒する。高校時代、自分のことを見下すと毛嫌いしていたカンナの暴言に曝されて来栖は苦笑しつつも懐かしさを覚えていたようだつた。

「「」んな元ヤンに初めてを捧げたなんて丹が可哀想だわ……」

「そんなことないよ、クーくんは初めから優しくしてくれているよ

「…丹、あんたホント天然ね」

丹の初めての相手が悪名高い不良だった来栖である」とをカナンは嘆くが、丹は自然な口調で大胆な発言をする。素で赤裸々なことを口走る丹をカナンはある種の尊敬の籠もった眼差しで見つめ、向かいの席に並ぶ男たちは揃って恥ずかしそうに顔を赤らめるというづぶな反応を見せた。

「できるならいつか、赤ちゃんが欲しいなあ

「丹！？」

「目が据わっちゃってる、もうこの子できあがってるよ……」

来栖が自分をどのように扱っているのかといつことに続いて、丹は子どもを持ちたいという願望を語り始める。再びの丹の爆弾発言に一同の視線は彼女に集中し、カナンはすっかり丹が酒に呑まれてしまっていると判断した。

「水持つてくる。天満、少しの間丹のことを頼む」

「分かった。そういうや丹、あんた全然飲めなかつたね」

来栖は席を立つて店のキッチンから丹の酔いを醒ますための水を持つてこようとする。来栖に丹の介抱を頼まれたカナンは、丹の手から梅酒が半分ほど残ったグラスをもぎ取ると、親友が酒に滅法弱

「じ」とを失念して「じ」とを悔やんだ。

「クーくんは、クーくんは赤ちゃん欲しいのか？」

「切島さん大丈夫、酔っ払い過ぎじゃない？」

キッチンに向かおうとする来栖の腕を掴むと、丹は呂律の回らなくなってきたたどたどしい口調で来栖に「子どもが欲しくないか」と訊ねて来る。明らかに平時と様子が異なっている丹のことを雪人は不安そうな顔で察した。

「どうなのクーくん、ねえ答えてよっ。」

「俺は欲しくない」

丹はカンナの体に寄りかかって上田遣いで来栖のことを見つめながら、彼の腕を揺すって自分の質問に答えるようになれる。来栖は目を閉じて一呼吸置くと、きつぱりと短い返事をした。

恋人の丹が子どもを望んでいるのと真っ向から対立する回答を来栖がしたのを聞いて、カンナも雪人も表情を強張らせた。無言のまま視線を交錯させる丹と来栖の間に不穏な空気が漂い始める。

「クーくんはわたしのこと好きじゃないの、だからわたしとの子どもが欲しくないの？」

「そんな訳あるか、お前のことは誰よりも愛してるよ

「だつたらどうして？」

「子どもが生まれたら、今は一極集中的に注いでもらえる愛情が減つちまうからだよ」

「うわ、サイマー……」

母親となつた丹が子どもに愛情を注ぐせいで自分に向けられる愛情が減つてしまつことが嫌だという来栖の発言に対し、カンナはあからさまに不快感を見せる。

「でも家業を継がせるためには子どもが必要なんだよな。だから感情的には欲しくないけど、家業のためににはいざれ子どもを持たなきやいけねえんだよな」

「なんて血[口]中な……やつぱりサイマーの男ね」

「カンナ、そつ思つても切島さんと来栖の話を邪魔しちゃ駄目だよ」

家業の後継者を作るためには子どもを持つ必要があるという来栖の言葉にカンナは再び嫌悪感を抱くが、他人が横槍を出さずに当人同士にしつかりと話し合つべきだと雪人は彼女を宥める。

「わたしはクーくんと反対。感情的には子どもが欲しいけど、生まってきた子にクーくんの仕事を継いで欲しくない。クーくんがご先祖様から受け継いだ役割がどんなに大変なものかわたしも知つていい、だからそんな辛い思いはして欲しくない」

「丹……」

酩酊している割に冷静な意見を丹が返してくると、来栖は恋人とどれだけ時を重ねても気持ちの擦れ違いは避けられないことを認識

する。

「けど今はこの街のみんなのために頑張っているクーくんを一番に支えてあげたい。わたしの好きだつて気持ちが支えになるのなら、全部クーくんにあげるよ」

丹は来栖の腕を掴んでいた手をずらして彼の手を握ると、そのまま立ち上がりつて来栖と視線を合わせようとする。丹は上背が170cmほどあり決して小柄ではなかつたが、それでも190cm近くある来栖のことを見上げなければならなかつた。

丹は少々上目遣いで来栖に微笑みかけると、彼の胸に倒れこんでいく。

「丹！？」

力なく来栖の腕に抱かれて支えられている丹の容態をカンナは案じ、その声はフロア中に響き渡つた。

「心配するな、酔い潰れて眠つちまつただけだ」

来栖は自分の腕の中ですやすやと寝息を立てている丹を呆れた顔で見つめて、余計な気を揉む必要がないことをカンナたちに知らせる。

「そう、よかつた……」

「丹のこと、上に寝かせてくる。多分朝まで起きないだろうが勘弁してくれ」

来栖は一度膝を屈めると、丹の足と背中に手を通して彼女の体を軽々と持ち上げる。

「気にしないよ、それよりも丹のことよりじへね」

「ああ、しばらくの間、この店はあなたたち二人の貸切だ。楽しんでくれよ」

来栖は旧友たちに語らいを楽しむといいと言い残して、丹を俗にいうお姫様だっこしながら店の奥にある扉を潜つて寝室のある2階へと登つていった。

「まさか来栖くん、気前のいい」と言つて丹の寝込みを襲つ氣じゃないわよね?」

「ねえカンナ、君はもう少し来栖に寛容になつてもいいと思つんだけど?」

2階に上がつたきり戻つてこない来栖が丹に狼藉を働いているのではないかと邪推するカンナを、雪人はやんわりとした態度で諫める。

「とにかく、雪人はどうなの?」

「どうつて、何が?」

「わたしとの将来のこと。ビリーハー家を建てるかとか、子供もは何人欲しいかとか」

「そ、それは」

カンナに今後の関係の在り方を問われた途端、雪人は来栖の速やかな帰還を切に願わずにはいられなかつた。

Life plan 了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6025y/>

ラング・ド・シャ

2012年1月8日22時52分発行